第６回牧之原市教育のあり方検討委員会　次第

日時：平成30年11月22日（木）午後１時30分～
会場：牧之原市役所相良庁舎３階会議室

１　開　　会

２　教育長あいさつ

３　議　　題

（１）答申案について（説明）

（２）答申内容検討

４　連絡事項

・答申及び講演会について

５　閉　　会

担　当：牧之原市教育文化部教育総務課
電　話：０５４８－５３－２６４２
ＦＡＸ：０５４８－５３－２６５７
E-mail：kyoiku@city.makinohara.shizuoka.jp

学校規模別メリット・デメリット

小規模		大規模	
メリット	デメリット	メリット	デメリット
◎学習面			
• 児童生徒の一人ひとりに目が届きやすく、きめ細やかな指導が行いやすい。 • 学校行事や部活動等において、児童生徒一人ひとりの個別の活動機会を設定しやすい。	• 集団の中で、多様な考え方に触れる機会や学び合いの機会、切磋琢磨する機会が少なくなりやすい。 • １学年１学級では、ともに努力してよりよい集団を目指す学級間の相互啓発がなされにくい。 • 運動などの学校行事や音楽活動等の集団教育活動に制約が生じやすい。 • 中学校の各教科の免許を持つ教員を配置しにくい。 • 児童生徒数、教員数が少ないため、グループ学習や習熟度別学習、小学校の専科教員による指導など、多様な学習・指導形態をとりにくい。 • 部活動等の設置が限定され、選択の幅が縮まりやすい。	• 集団の中で、多様な考え方に触れ、認め合い、協力し合い、切磋琢磨することを通じて、一人ひとりの資質や能力をさらに伸ばしやすい。 • 運動などの学校行事や音楽活動等の集団教育活動に活気が生じやすい。 • 中学校の各教科の免許を持つ教員を配置しやすい。 • 児童生徒数、教員数がある程度多いため、グループ学習や習熟度別学習、小学校の専科教員による指導など、多様な学習・指導形態を取りやすい。 • さまざまな種類の部活動等の設置が可能となり、選択の幅が広がりやすい。	• 全教員による各児童生徒一人ひとりの把握が難しくなりやすい。 • 学校行事や部活動等において、児童生徒一人ひとりの個別の活動機会を設定しやすい。
◎生活面			
• 児童生徒相互の人間関係が深まりやすい。 • 異学年間の縦の交流が生まれやすい。 • 児童生徒一人ひとりに目が届きやすく、きめ細やかな指導が行いやすい。	• クラス替えが困難なことなどから、人間関係や相互の評価等が固定化しやすい。 • 集団内の男女比に極端な偏りが生じやすくなる可能性がある。 • 切磋琢磨する機会等が少なくなりやすい。 • 組織的な体制が組みにくく、指導方法等に制約が生じやすい。	• クラス替えがしやすいことなどから、豊かな人間関係の構築や多様な集団の形成が図られやすい。 • 切磋琢磨すること等を通じて、社会性や協調性、たくましさ等を育みやすい。 • 学校全体での組織的な指導体制を組みやすい。	• 学年内・異学年間の交流が不十分になりやすい。 • 全教員による各児童生徒一人ひとりの把握が難しくなりやすい。
◎学校運営面・財政面			
• 全教員間の意思疎通が図りやすく、相互の連携が密になりやすい。 • 学校が一体となって活動しやすい。 • 施設設備の利用時間の調整が行いやすい。	• 教員数が少ないため、経験、教科、特性などの面でバランスのとれた配置が行いにくい。 • 学年別や教科別の教員同士で、学習指導や生徒指導等についての相談・研究・切磋琢磨等が行いにくい。 • 一人に複数の校務分掌が集中しやすい。 • 教員の出張、研修等の調整が難しくなりやすい。 • 子ども一人あたりにかかる経費が大きくなりやすい。	• 教員数がある程度多いため、経験、教科、特性などの面でバランスのとれた教員配置を行いやすい。 • 学年別や教科別の教員同士で、学習指導や生徒指導についての相談・研究・協力・切磋琢磨等が行いやすい。 • 校務分掌を組織的に行いやすい。 • 出張、研修等に参加しやすい。 • 子ども一人あたりにかかる経費が少なくなりやすい。	• 教員相互の連絡調整が図りづらい。 • 特別教室や体育館等の施設整備の利用の面から、学校活動に一定の制約が生じる場合がある。
◎その他			
• 保護者や地域社会との連携が図りやすい。	• PTA 活動等における保護者一人あたりの負担が大きくなりやすい。	• PTA 活動等において、役割分担により、保護者の負担を分散しやすい。	• 保護者や地域社会との連携が難しくなりやすい。

出典：公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引～少子化に対応した活力ある学校づくりに向けて～（平成 27 年１月 27 日文部科学省）

参考：学校数による学校規模分類（公立小・中学校の国庫負担事業認定申請の手引き）

分類	過小規模校	小規模校	適正規模校	大規模校	過大規模校
小学校学級数	１～５	６～11	12～18	19～30	31 以上
中学校学級数	１～２	３～11			

※学校教育法施行規則第 41 条「小学校の学級数は、12 学級以上 18 学級以下を標準とする。
ただし、地域の実態その他により特別の事情のあるときは、この限りでない。

（案）

望ましい教育環境のあり方について（答申）

平成30年12月20日

牧之原市教育のあり方検討委員会

目　次

1　検討の目的　…　1

2　検討の背景　…　1

3　牧之原市が目指す教育の基本的な考え方　…　1

4　実現のための具体的な方策　…　4

5　結び　…　6

資料編　　資料１～９

牧之原市教育のあり方検討委員会では、市教育委員会から諮問された、「今後の牧之原市を見据えた望ましい教育環境の方向性と具体案」についてまとめるため検討する。(資料1～3)

少子高齢化の進展や急激な技術革新、グローバル化の進展により、産業構造や社会が大きく変わることが予測されている。国はこれに対応するために、第3次教育振興基本計画や新学習指導要領等を整備する等教育改革を進めている。

今後の牧之原市は、人口が減少していき、校舎も建築後50年を経過するものが多数となる。平成27年度に策定された第2次牧之原市総合計画では、「若者が魅力と感じる教育環境の実現」、教育大綱では、「子どもたちが学びやすい環境を整えるため小学校の規模と配置の適正化を図る」こと、さらには、平成28年11月に策定された「牧之原市公共施設マネジメント基本計画」の方針では、「小中連携教育を進め、魅力ある教育環境を実現するため、小中学校再編計画の策定」が謳われている。(資料4，5) この課題に対応しながらも、「自立した人間として、主体的に判断し、多様な人々と協働しながら新たな価値を創造する人材の育成(※1)」や牧之原市教育大綱の理念である「こころざしを持ち夢あるひとづくり」を実現するための教育環境には何が必要かを明確にすることが求められている。

「次代を切り拓く力を育むために、キャリア教育を軸にした小中一貫教育と社会全体で子どもを育てる仕組みづくりが必要である。」

(1) 子どもを取り巻く状況

全国的な傾向として、小学校6年生から中学校1年生になるときに、いじめ、不登校等の認知件数が増加しており(※2)、牧之原市においても不登校には同様の傾向が見られる。また昔と比べて子どもの成長が2年程度早まっていることなどが確認されている。(資料6)

※1　平成30年6月15日に閣議決定された「第3期教育振興基本計画」の2030年以降の社会像の展望を踏まえた個人と社会の目指すべき姿からの抜粋

※2　小学校から中学校に進学した際に、不登校やいじめの増加等の問題が生じることを、中1ギャップという。

市の子どもの学力は、全国平均とほぼ同じ。全国と比べて自己肯定感が高く、地域との連携ができている、という特徴がある。(資料7) ただし、家庭学習の時間が少ないなど、家庭での時間の使い方には課題がある。

(2) 子どもにつけたい力
「次代を切り拓く力」

10年後、20年後の大きく変わっていく社会の中で、新しい考え方やアイデアを生み出し、主体的に実行できることは、どんな未来にあっても自分で自分の未来を切り拓くことができる力となる。「次代を切り拓く力」をつけることを最終目標とし、義務教育9年間の系統性立てた学びにより必要な力をつけることができるようにするべきである。

① 学びのプロセス (資料8)
「学ぶ」「創造する」「活用する」サイクル

学びのプロセスで土台となるのは、「生きる力の基礎・基本」即ち、心身のたくましさや自己肯定感、命の大切さ等、人が生きていく上で大切な部分である。

「学ぶ」…これからの時代に必要な力や地域への愛着・誇りを育む。
- ○ 基礎的な知識・技能：基礎的な知識・技能を習得する。
- ○ 多様性を受容する力：さまざまな価値観や文化、背景、立場があることを理解し、受け入れることができる。

「創造する」…多様なものとつながる中で新しい価値を生み出し、未来を描く。
- ○ 創り出す力：新しい考えやアイデアを創り出し、新たな価値を生み出したりすることができる。
- ○ 課題発見・解決力：疑問を持ち、自分自身で考え、他者と協働して、解決に向けて行動したり、主体的に実行することができる。
- ○ コミュニケーション力：相互に思いや考えを伝え合い、聴き合い、共感しながら、よりよい関係を築くことができる。

「活用する」…学んだことや考えたことを実社会で試すことができる。

○ 活用力：自分が学習したことや得た情報、生み出したアイデア等を実社会や自分の将来に活かすことができる。

② 学びの基本姿勢

「対話」「体験」「協働」を通した豊かな学びを実現する。

多様な人と触れ合うことにより、新たな発想や気づきが生まれ、人との関わり方を学んだり、自分の個性を見つけたりすることができるようになる。そして、自分が学んだことを社会で実際にやってみることにより、社会的に自立した人に成長することができる。

「対話」…牧之原市では、合併直後から「対話によるまちづくり」を進めてきた。多様な人と聴き合うことを通じて、参加者が主体的になり、新たな学びや気づきが生まれる。

対話とは、相手と聴きあう中で、互いに「違い」を認め、受け入れることから始まる。違いを認め合うと、いろいろな視点や考え方があることが分かり、さまざまな課題を解決したり、新しいアイデアを生み出したりすることにつながる。さらに、アイデアを具体的な計画として練り上げ、多くの協力者を巻き込んで実行することも対話によってできることである。このような力を持つ対話を通じた学びを進めていく。

「体験」…子どもたちにとって、「実際にやってみる」ということは、言葉で教わる何倍もの価値があるものである。

実際に体験・行動する中で、気づきや興味が生まれたり、自分の特性や可能性に気づいたりする。また、成功の達成感・満足感を味わうこともでき、さらに、思うようにいかないことに直面すること、そしてそれをどうしたら解決・改善することができるかを考え、実行する体験は、子どもたちを大きく成長させるものとなる。社会とつながり、学んだことを実際に社会で実行する機会をつくっていく。

「協働」…子どもたちに豊かな学びの環境を提供するためには、社会とのつながりや多様な人との協働が求められる。

学校同士、学校と地域、学校と企業、地域と企業等、子どもの学びを豊かにするためのさまざまな連携・協働が考えることができる。社会とつながり、学びを活かし、さらに学ぶことにより社会的・職業的に自立した人に成長することができると考える。

子どもたちが「次代を切り拓く力」を身につけるためには、学校にいるうちから、学んだことを実社会で活かし、さまざまな対話することができる環境が必要である。そのために、以下４つの方策を提案する。

（１）キャリア教育の推進～「主体性」を重視した個の育成～（資料９）

これからの学びにはまず、自分がどんな生き方をしたいかということが大切である。一人一人がどう生きていくかということ、そして自分の将来に必要な力は何なのかということを段階的に身に付ける「キャリア教育」を市の学びの軸として進めていただきたい。

キャリア教育では、自己のアイデンティティの確立や自分の将来を考えることだけではなく、課題発見・解決のプロセスも学びの一つと捉えている。国がこれからの「真の学力」と提唱する、思考力・判断力・表現力や主体性を持って多様な人々と協働し社会とつながることを可能にする学びである。

（２）小中一貫教育の実現～「多様性」を尊重した集団生活の重視～（資料９）

子どもたちは、集団活動によって、自分とは異なる考えの仲間たちに触れ合う中で、自分の生き方を見つけることができるようになる。

多様性のある集団活動を可能にし、９年間の系統立てた教育をデザインすることができる手法として小中一貫教育がある。視察等を通してそれが有効であると考えたため、その環境の中で市の子どもたちを育てていただきたい。

また、保育・幼稚園及び高校との接続についても併せて考える必要がある。

（３）社会全体で育てる仕組み（コミュニティ・スクール）の構築（資料９）

本市には、地域の人たちが小中学校に深く関わり、子どもたちも地域で活発に活動をしているという特徴がある。これを発展させ、さらに連携できるようにするためには、学校と地域の人たちが協働する仕組みである「コミュニティ・スクール」が有効である。（※３）

※３　平成 29 年３月「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の一部が改正され、設置が努力義務化されている。

コミュニティ・スクールは、学校がつくったカリキュラムを承認し、地域と学校が、目標を共有し活動をするというものである。学校がやるべきことと地域がやるべきことに、それぞれが補完し合いながらも主体性を持って取り組み、それを総合的に評価し、改善していく仕組みである。

コミュニティ・スクールは、中学校区ごとに設置することとし、モデル校を指定して試行・検討をしながら、牧之原市に相応しいコミュニティ・スクールの体制を構築されたい。

（4）魅力ある学校施設

学校施設は、安心・安全で、学びやすく、通いたい・通わせたいと思える施設でなければならない。そのために、以下の５つの視点を提案する。

● クラス替えができるように１学年２学級以上の規模とする

多様な意見や機会に触れるためには、ある程度の人数が必要であるため、学校の規模を考える際は、クラス替えができることを要件にすべきである。複数の学級があることで、子どもが多様性に触れる機会や新たな創造を生む機会を増やすことができると考える。

● 集約して人と予算を集中する

将来の児童生徒数の推移から、複数学級を維持するには、学校を集約する必要がある。

集約により予算や人を集中し、ICT の導入等時代合った施設・設備とするとともに、きめ細やかな対応ができるよう教員以外の専門スタッフの配置や教員業務の改善を図り、教育活動が充実することを求める。

● 安心・安全な学校とする

新しい学校施設は、安心・安全の確保を強く求める。学校施設は、津波浸水区域外に建て、防災機能の充実した施設とされたい。

● 交流ができる場をつくる

学校施設の一部又は隣接した場所に、地域の人が活動できる場をつくっていただきたい。これにより多様な触れ合いやコミュニケーションが生まれ、教育内容の充実だけでなく、子どもにも地域の人にも、「この学校に通いたい・通わせたい」と思ってもらえるような愛される施設となることが期待できる。

● **まちづくりの視点で考える**

小中学校を一体型又は隣接した施設にすることや、図書館、プール等の市民との供用、学校施設中に地域の活動の場を設ける等、学校施設の複合化や周辺に公共施設を整備し共有することにより、人づくりや文化の拠点としての機能を持つことを望む。

機能を集中することにより、人の流れをつくることができる。そのためには、スクールバスやコミュニティバスなどの交通ネットワークの整備や、人が集まりやすい機能の充実など、まちづくりと合わせて考えていくことも重要である。

（5）実施時期

2030年を目途とし（※4）、できる限り早い時期に整備する

市民だけでなく、市外の人も魅力と感じ、「牧之原市の教育を受けたい・受けさせたい」と思い牧之原市に来てもらえるように、前述の提案の望ましい教育環境をできる限り早く実現すべきである。

施設に関しては、2030年を目途とした、できる限り早い時期の整備とし、キャリア教育を軸とした小中一貫教育やコミュニティ・スクールについては、早急に実施されたい。

今回答申する「望ましい教育環境」の実現に向けて、プログラムや仕組みづくり等の検討及び試行、各種調整等が必要である。検討に当たっては、常に、子どもの学びや育ちを中心に考えるとともに、着実かつ速やかに検討することが大切である。そのために必要なスタッフを置き、適切な実施体制を構築することを求める。

また、学校組合の扱いについては、関係市町と調整を進められたい。

※4　次期牧之原市総合計画の計画終了予定時期。

資　料　編

資料１　望ましい教育環境のあり方について（諮問）

資料２　牧之原市教育のあり方検討員会条例

資料３　牧之原市教育のあり方検討委員名簿及び検討経過

資料４　学校施設について

資料５　児童生徒数と学校規模について

資料６　平成 30 年度
　　牧之原の子どもたちの学力・学習の様子

資料７　子どもの生徒指導面及び身体面の状況

資料８　基本理念実現のための９年間の連続した学び

資料９　次代を切り拓く力をつけるための体制・仕組み

資料１

教教第１７　号
平成30年２月１日

牧之原市教育のあり方検討委員会委員長　様

牧之原市教育委員会
教育長　　坪池　泰

望ましい教育環境のあり方について（諮問）

今後の牧之原市にとって望ましい教育環境を明らかにするために、牧之原市教育のあり方検討委員会条例（平成29年条例第26号）第２条第１項の規定により、下記の事項について諮問します。

記

１　諮問する事項
今後の牧之原市を見据えた、望ましい教育環境の方向性と具体案

２　答申にあたっての留意点
多様な市民の意見を反映し、人々が魅力を感じる教育環境や、地域と学校の関わりなどについて検討すること

資料２

○牧之原市教育のあり方検討委員会条例

平成29年12月22日
条例第26号

（設置）

第１条　牧之原市の魅力ある教育環境の実現のため、地方自治法（昭和22年法律第67号）第138条の４第３項の規定に基づき、牧之原市教育のあり方検討委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（所掌事務）

第２条　委員会は、教育委員会の諮問に応じて、市の教育のあり方の方針に関し必要な事項について調査審議し、意見を答申する。

（組織）

第３条　委員会は、委員10人以内で組織する。

２　委員は、次に掲げる者のうちから、教育長が委嘱する。

（１）　学識経験を有する者

（２）　学校関係者

（３）　幼稚園、保育園、認定こども園、小学校又は中学校に在籍する者の保護者

（４）　事業者

（５）　公募による者

３　委員の任期は、委嘱の日から平成31年３月31日までとする。

（委員長及び副委員長）

第４条　委員会に委員長及び副委員長を置き、委員の互選によりこれを定める。

２　委員長は、会務を総理し、委員会を代表する。

３　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき、又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。

（会議）

第５条　委員会の会議（以下「会議」という。）は、委員長が招集し、その議長となる。

２　会議は、委員の過半数の出席がなければ開くことができない。

３　会議の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

４　議長は、必要があると認めるときは、会議に委員以外の者の出席を求め、説明又は意見を聴くことができる。

（庶務）

第６条　委員会の庶務は、教育委員会事務局において処理する。

（委任）

第７条　この条例に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、教育長が別に定める。

附　則

（施行期日）

１　この条例は、公布の日から施行する。

（最初の会議の招集）

２　この条例の施行後最初に行われる委員会は、第５条第１項の規定にかかわ

らず、教育長がこれを招集する。

（この条例の失効）

3　この条例は、平成31年３月31日限り、その効力を失う。

資料３

牧之原市教育のあり方検討委員名簿及び検討経過

■牧之原市教育のあり方検討委員名簿

	氏名	分類	職業
1	島田　桂吾	学識経験を有する者	静岡大学教育学部講師
2	加藤　百合子	学識経験を有する者	㈱M2lab代表取締役社長 テラスマイル㈱取締役 信州大学客員教授、新静岡学園理事
3	野村　智子	学校関係者	小学校教諭
4	佐藤　利彦	学校関係者	中学校教諭
5	池ヶ谷　祐太	保護者	就学前児保護者
6	橋山　妙子	保護者	小学校保護者
7	大石　斉	事業者	矢崎部品㈱ ものづくりセンター
8	今野　英明	事業者	光誠工業㈱
9	中島　佑実	公募による者	保育教諭
10	石井　眞澄	公募による者	医師

■牧之原市教育のあり方検討委員会経過

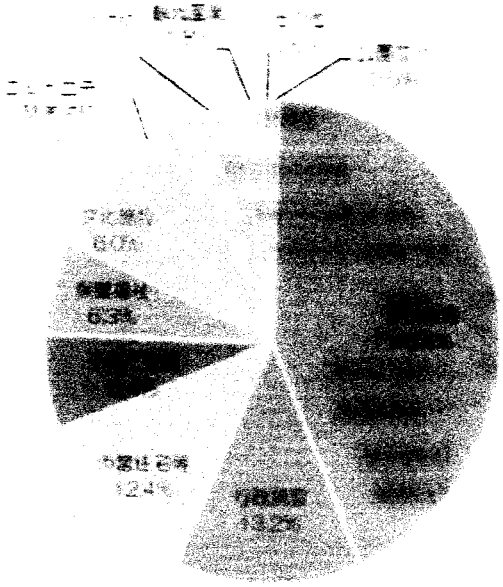
会議等	開催日時	内容
第1回	平成30年2月1日	○諮問・委員委嘱 ○教育内容「子どもにつけたい力」
第2回	平成30年3月5日	○教育内容「子どもにつけたい力」
第3回	平成30年4月18日	○教育内容を実現するための体制
研修会	平成30年5月16日	講師：島根県雲南市教育委員会職員 「キャリア教育を柱とした雲南市の教育」
視察研修	平成30年7月4日 ～5日	小中一貫教育・複合施設の視察 ①京都市立東山泉小中学校 ②京都教育大学附属京都小中学校 ③愛知県海部郡飛島村立飛島学園
第4回	平成30年7月25日	○教育内容を実現するための体制・施設設備
第5回	平成30年8月21日	○施設設備・規模・時期
第6回	平成30年11月22日	○答申書まとめ

資料４

学校施設について

１　市の公共施設の状況

施設用途別の建物延床面積の内訳



施設用途別の保有状況

施設分類	施設数	建物棟	延床面積	面積割合
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
施設合計	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

２　牧之原市の子どもが通っている学校

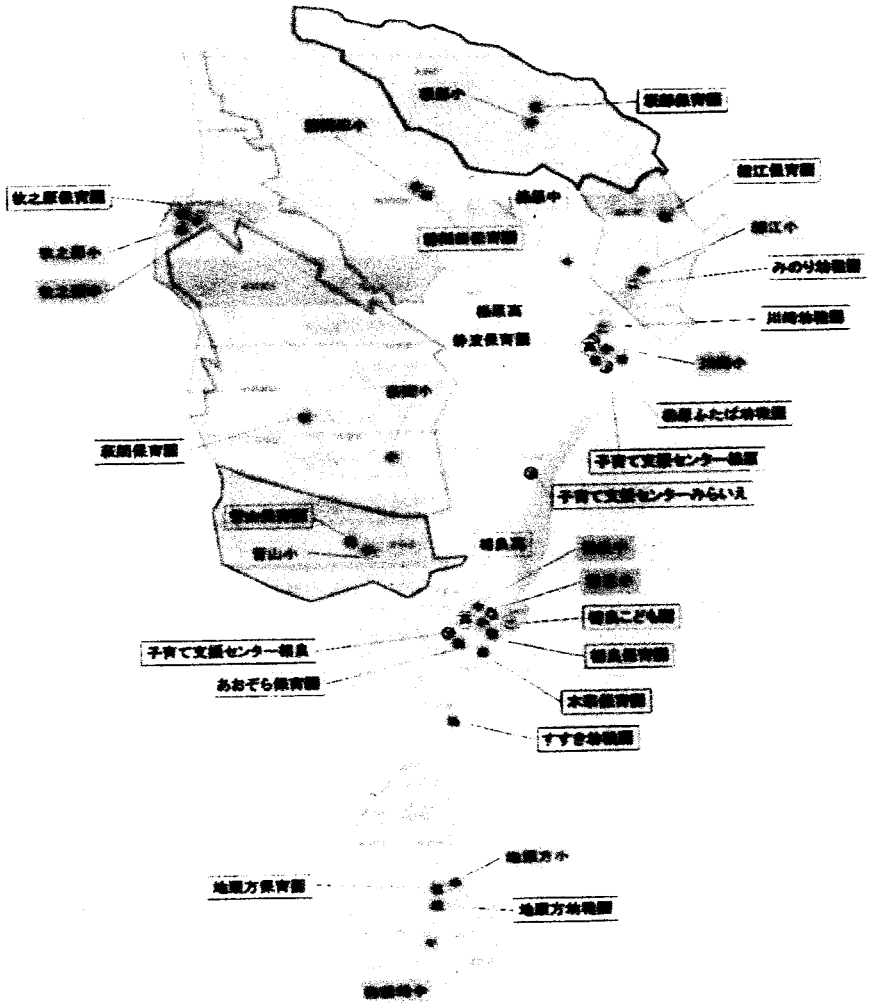
	学校名
小学校（９校）	相良小学校
	菅山小学校
	萩間小学校
	地頭方小学校
	萩間小学校
	川崎小学校
	細江小学校
	勝間田小学校
	坂部小学校
	牧之原小学校　■

	学校名
中学校（４校）	相良中学校
	榛原中学校
	牧之原中学校　■
	御前崎中学校　◇

■　牧之原市菊川市学校組合で運営をしており、管理者は牧之原市。

◇　御前崎市牧之原市学校組合で運営をしており、管理者は御前崎市。

3　学校等の位置



4　学校施設の建築年数

	学校名	延床面積(㎡)※1	建築年※2	築年数※3
1	相良小学校	8,304	昭和48年3月	45
2	菅山小学校	3,803	昭和56年3月	37
3	萩間小学校	3,610	昭和40年11月	53
4	地頭方小学校	4,599	昭和40年3月	53
5	川崎小学校	6,536	昭和43年3月	50
6	細江小学校	5,934	昭和45年3月	48
7	勝間田小学校	3,579	昭和39年3月	54
8	坂部小学校	3,211	昭和37年8月	56
9	相良中学校	10,496	昭和50年8月	43
10	榛原中学校	10,678	昭和47年3月	46
11	牧之原小学校	3,967	昭和45年3月	48
12	牧之原中学校	4,592	昭和53年1月	40

※1　学校が所有する建築物の合計

※2　主な校舎の建築年数

※3　2018年度時点

資料５

児童生徒数と学級規模について

１　児童生徒数（平成30年５月１日）

設置者	学校名	人数	備考
牧之原市	相良小学校	526 人	
	菅山小学校	148 人	
	萩間小学校	129 人	
	地頭方小学校	207 人	
	川崎小学校	439 人	
	細江小学校	448 人	
	勝間田小学校	140 人	
	坂部小学校	107 人	
	相良中学校	419 人	
	榛原中学校	543 人	
牧之原市菊川市学校組合	牧之原小学校	170 人	牧之原市 145 人
	牧之原中学校	55 人	牧之原市　41 人
御前崎市牧之原市学校組合	御前崎中学校	387 人	牧之原市 113 人

２　学校規模

牧之原市が管理者の学校 12 校の状況

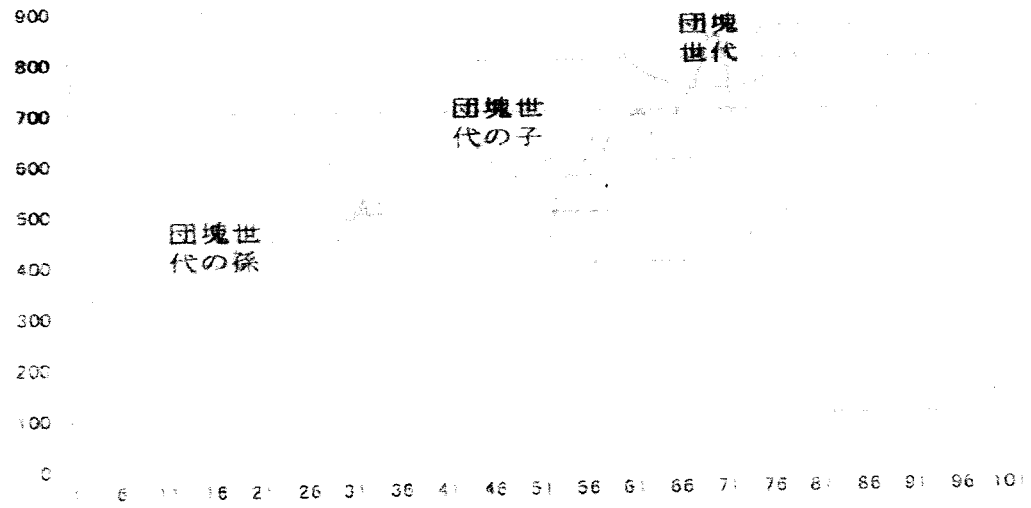
○ 小規模校　　７校（菅山小・萩間小・地頭方小・勝間田小・坂部小・牧之原小・牧之原中）

○ 適正規模校　　５校（相良小・川崎小・細江小・相良中・榛原中）

参考：学校数による学校規模分類（公立小・中学校の国庫負担事業認定申請の手引き）

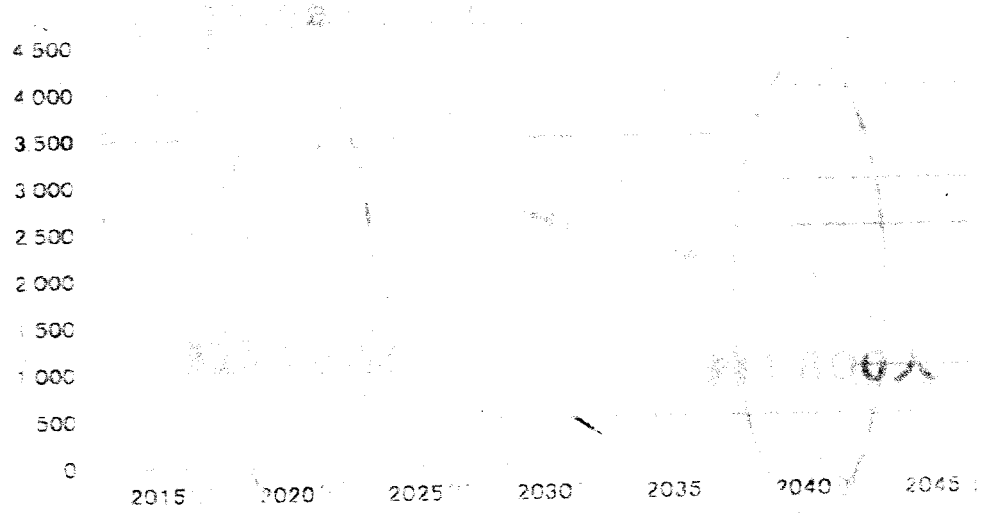
分類	過小規模	小規模	適正規模	大規模	過大規模
小学校学級数	１～５	６～11	12～18	19～30	31 以上
中学校学級数	１～２	３～11			

3　牧之原市の年齢別人口（市住民基本台帳 2018. 3. 31 現在）



4　牧之原市の５～14 歳の人口予測

（国立社会保障人口問題研究所 2018. 3. 30 発表地域別将来推計人口からの抜粋）



5　将来の小学生数と１学年の学級数（３５人学級換算）牧之原小には菊川市児童含

細江学区	562人 2.7組	481人 2.3組	418人 2.0組	357人 1.7組
御前崎学区	150人 0.7組	129人 0.6組	112人 0.5組	96人 0.5組
榛原学区	755人 3.6組	648人 3.1組	562人 2.7組	480人 2.3組
牧之原学区	102人 0.5組	87人 0.4組	76人 0.4組	65人 0.3組
計	1569人 7.5組	1345人 6.4組	1168人 5.6組	998人 4.8組

教育委員会連合会、教育委員会連合会小学校校長会教育委員会

■全国学力・学習状況調査について

「小学校」「中学校」の学力や学習状況を調査し、子どもの教育指導の改善と生活習慣の改善に役立てるものです。

【質問紙調査】
学習意欲、生活習慣、学習の環境等についての意識調査

（A 問題）【知識】
主として知識を問う問題

（B 問題）【活用】
主として活用・応用に関する問題

調査の構成　3種類で構成されています

教科調査の状況

小学校	国語A（27問）	国語B（8問）	算数A（14問）	算数B（11問）	理科（16問）
平成19年度の全国平均との比較	1問分低い	ほぼ同じ	ほぼ同じ	ほぼ同じ	0.5問分低い
中学校	国語A（32問）	国語B（9問）	数学A（36問）	数学B（14問）	理科（27問）
平成19年度の全国平均との比較	ほぼ同じ	ほぼ同じ	0.5問分高い	ほぼ同じ	0.5問分高い

※「ほぼ同じ」とは、全国平均正答数との差が0.5問よりちいさいことを示す。

国　語

「言葉をもとに言葉」、文の構成を考える「読む力」を身につけていきます。「物語」、目的に応じて文章を読み、押さえた事の中から文章として「書く力」をつけていくことがあります。また、漢字は使用するだけでなく、「言語の知識を活用できる力」を育てていきます。

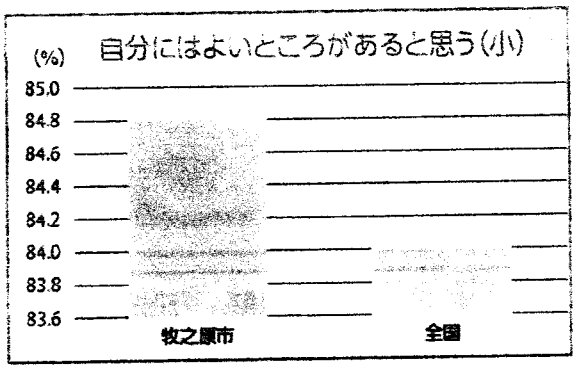
算数・数学

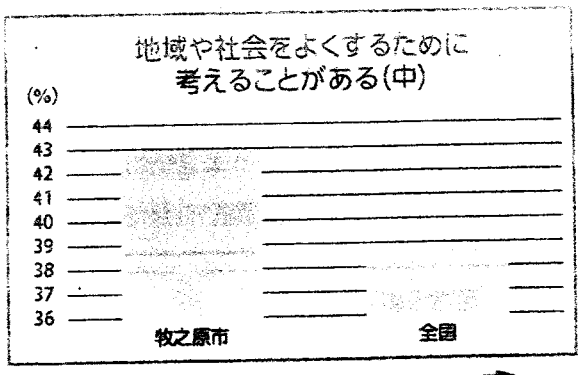
計算の仕方や解き方の説明の仕方について考え、まとめ、今後は、データの活用の仕方について、生活習慣に考察する（データを活用するか）をつけていくと必要があります。また、計算・考えを伝え合う学習を通して、正確の意味を説明に説明、目的に応じた説明に説明する力を育てていきます。

理　科

「自分の予想をもとに観察や実験を行っている」と答えた子どもの割合が多く、観察や実験を通して、基本的な思考力などの力を身につけつつあります。今後も、生活の中の問題を解決するために、身の回りの自然や物の現象について、科学的に解決する能力を育てていきます。

質問紙調査にみる牧之原の子どもたちのよさと課題



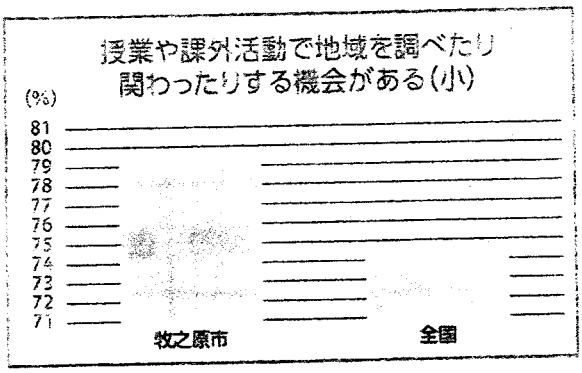


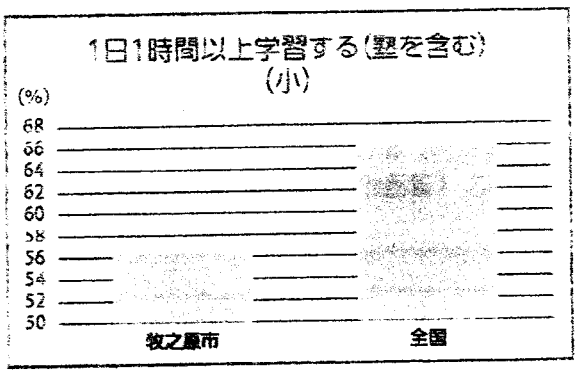
牧之原市では、教育活動全体を通して、意図的・計画的・組織的に自己肯定感を高める取組をしています。自己肯定感の高まりは、子どもたちの確かな自我を育て、全ての学びの基盤となります。また、自分も周囲も大切にして、社会に貢献しようとする心の育成にもつながっています。日々向上心をもって成長している子どもたちを、家庭、地域全体で支え、励ましていくよう今後ともお願いします。

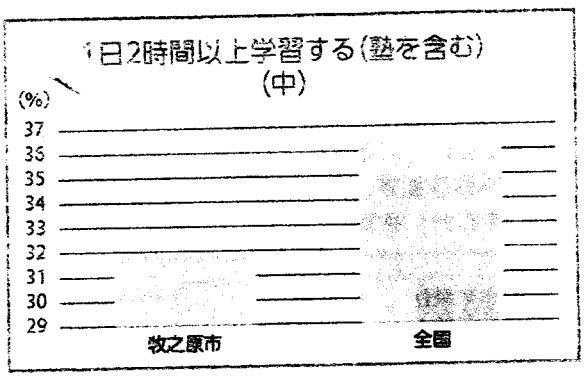
子どもたちは、体験活動を通して、地域のことをたくさん学んでいます。

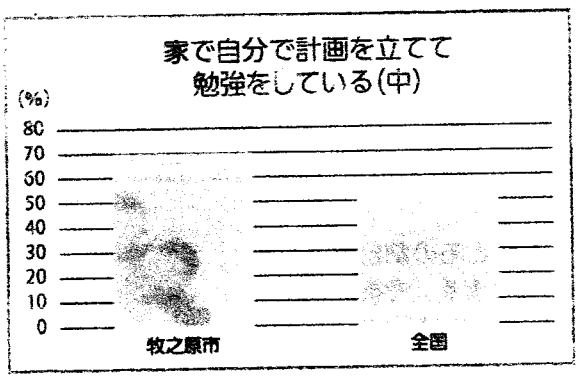
地域社会と学校が連携し、協働することで、子どもたちの安定した心を育むことができます。

今後も地域のよさを知り、発信する学習を行うことで、子どもたちと地域の絆を、一層深めていきます。









自分で計画を立てて学習する子どもが増えています。しかし、家庭学習の時間は全国平均と比べると少ない傾向にあります。家庭学習への主体的な取組を認め、励ましつつ、発達段階に応じた内容の見届けや助言をお願いします。

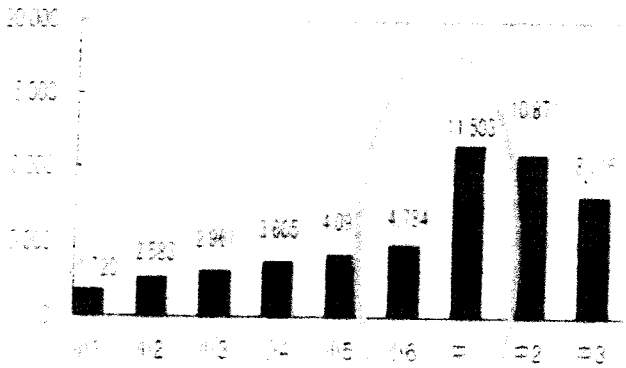
資料７

子どもの生徒指導面及び身体面の状況

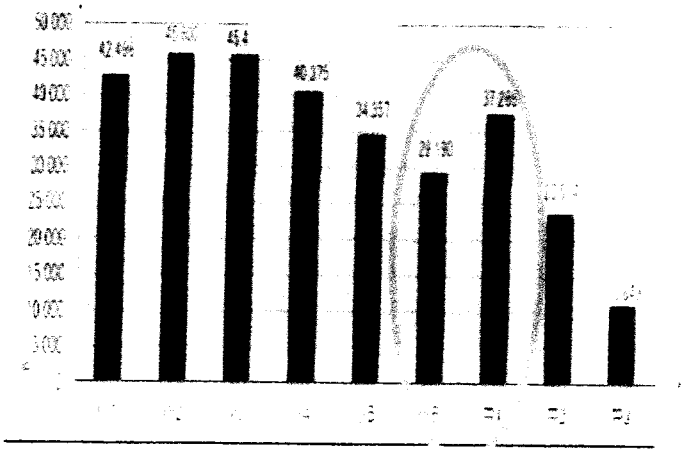
１　中１ギャップ（小学校６年生⇒中学校１年生）【生徒指導面】

出典：平成 28 年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（確定値）について（H30.2.23 文部科学省初等中等教育局児童生徒課）

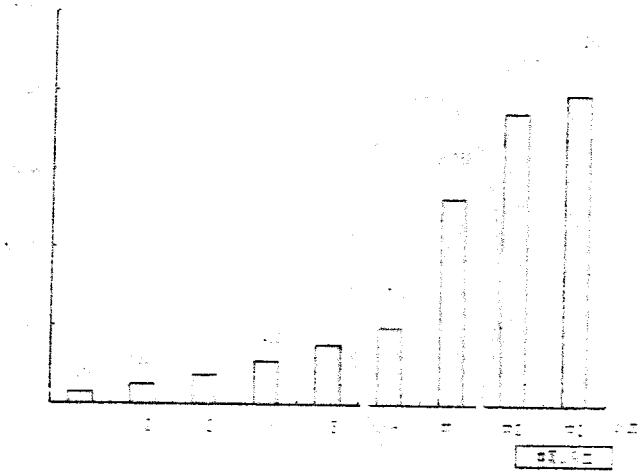
（１）暴力件数



（２）いじめ認知件数



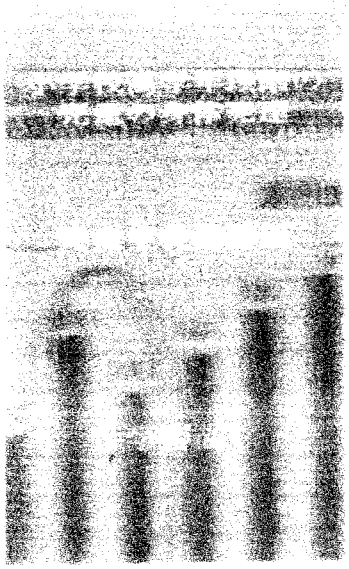
（３）不登校件数



２　小学校と中学校の違い

3　小学校高学年の子どもの状況

昭和20年代と比べて、２年ほど成長が早まっている。



- 平均身長や体重が大きく増加
- 女子の平均初潮時期

- 自己肯定感や自尊感情に対して、急に否定的になる傾向がある
- 不登校や長期欠席が増えている

- 「学校の楽しさ」、「教科や活動の時間の好き嫌い」について、肯定的回答をする児童の割合が下がる
- 経験的な理解で対応できる学習から、理論・抽象的な理解が必要な学習内容へ移行段階でのつまずきに大切な中学校の学習への支障をきたしている。

資料8

変化を切り拓く力

・社会に活かす
・効果を実感する

（基礎・能力）
・主体性
・実行力・行動力（略）

・新しい価値を生み出す
・未来を描く

（基礎・能力）
・思考力、判断力、表現力等の能力
・課題発見・解決力等

・これからの時代に必要な力や
地域への愛着や誇りを育む

（資質・能力）
・自己を理解・信頼

対話　コミュニケーション力

体験　気づき・発見、経験

協働　多様な人との協働

生きる力の基礎・基本

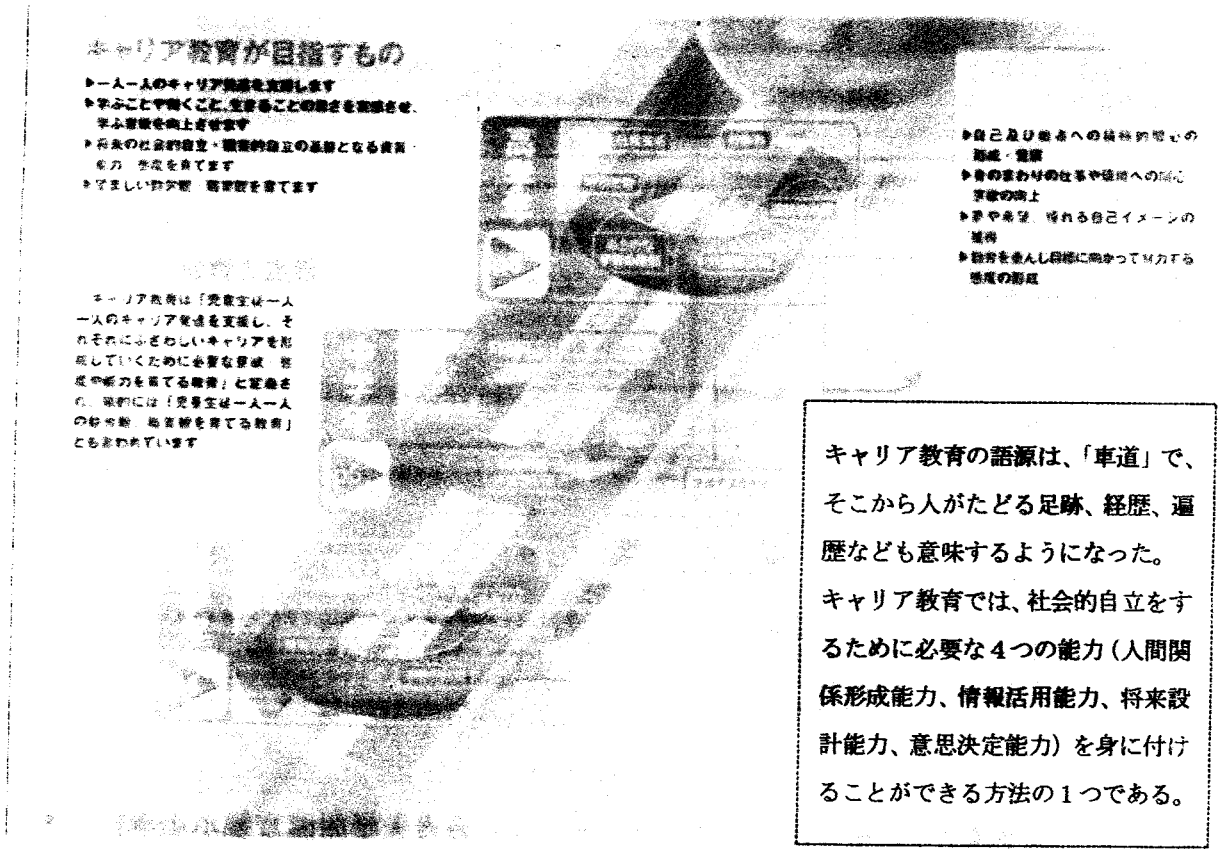
心身のたくましさ、自己肯定感や命の大切さなど、人が生きて行く上で大切な部分

資料９

次代を切り拓く力をつけるための体制・仕組み

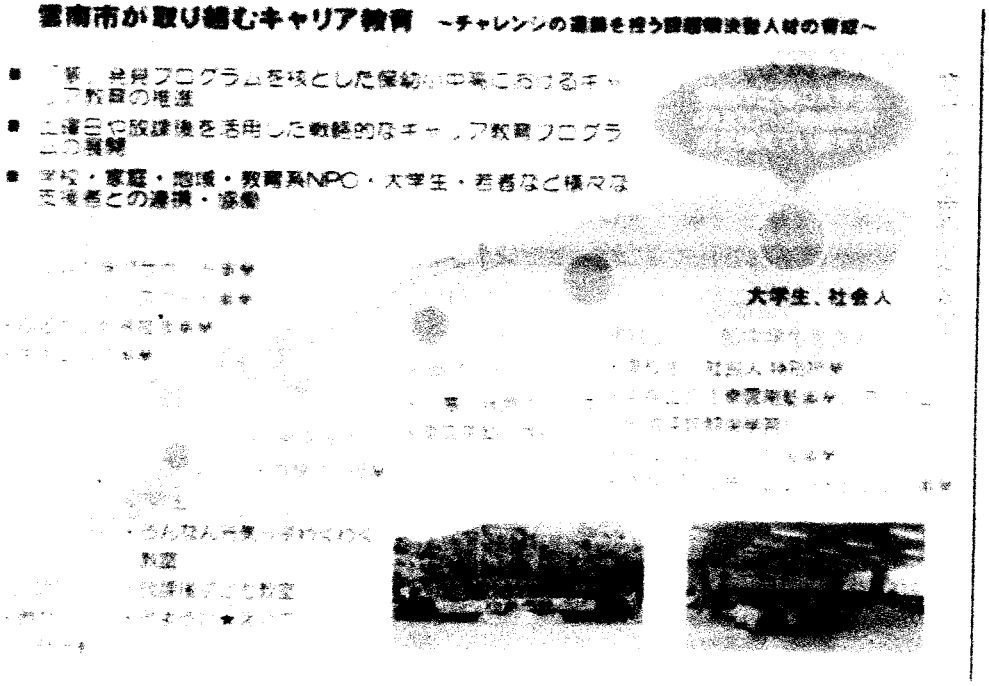
１　キャリア教育

（１）キャリアの全体像　※小学校におけるキャリア教育推進のために（平成21年３月）より



キャリア教育の語源は、「車道」で、そこから人がたどる足跡、経歴、遍歴なども意味するようになった。キャリア教育では、社会的自立をするために必要な４つの能力（人間関係形成能力、情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力）を身に付けることができる方法の１つである。

（２）先進事例：島根県雲南市



2　小中一貫教育

○　９年間のつながりを形態・枠の見直しを含めて考える。

○　義務教育の９年間をトータル的にデザインすることができる。

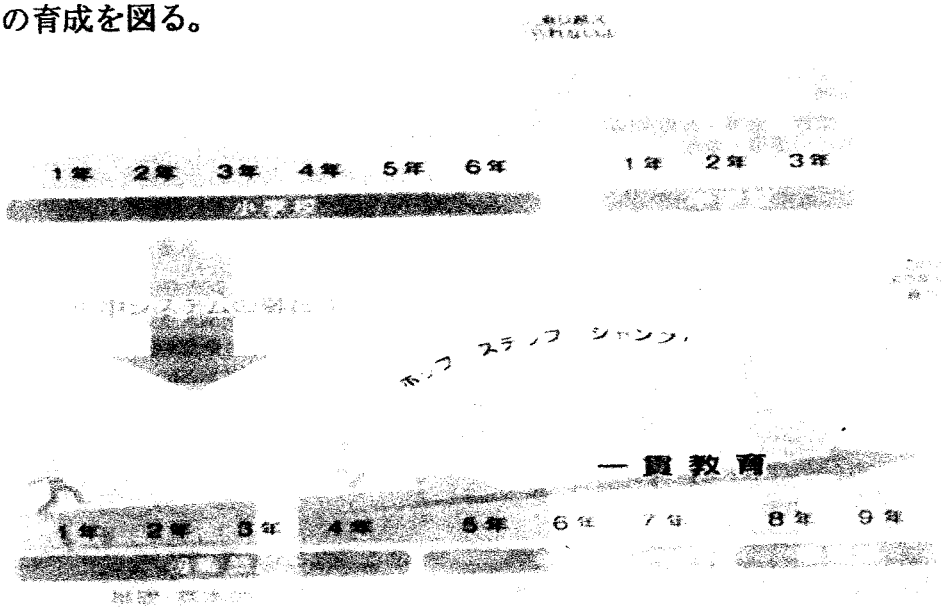
（１）小中一貫教育の種類

（参考）小中一貫教育に関する制度の概要

	義務教育学校	小中一貫型小学校・中学校	
		小中一貫型小学校 小中一貫型中学校	小中一貫型小学校 小中一貫型中学校
設置者	市	市 の設置者	異なる設置者
修業年限	9年	小学校6年　中学校3年	
校長・教職員	一人の校長　一つの教職員組織	それぞれに校長　教職員組織	
校舎・運営		小学校と中学校における教育を一貫して施すために、ふさわしい教育のあり方を考えることが基本	小学校が設置する一学校と、学校が設置する学校を教育上適切な運営体制を整備すること
免許	義務教育学校の教育職員は小学校・中学校の免許状を保有	所属する学校の免許状を保有していること	
教育課程	小学校の教育目標の設定 小学校の系統性・体系性に配慮がなされている教育課程の構成		
教育課程	○	○	○
教育課程	○	○	○
教育課程		教科一体型　独自教科等　独自科目等	
指導要領	学習指導要領は小学校設置基準 法令規定は中学校設置基準を準用	小学校には小学校設置基準、中学校には中学校設置基準を適用	
標準授業	18学級以上12学級以下	小学校、中学校それぞれ12学級以上18学級以下	
通学条件	おおむね4km以内	小学校はおおむね4km以内、中学校はおおむね6km以内	
教育委員会	市教育委員会の承認	市教育委員会の承認等	

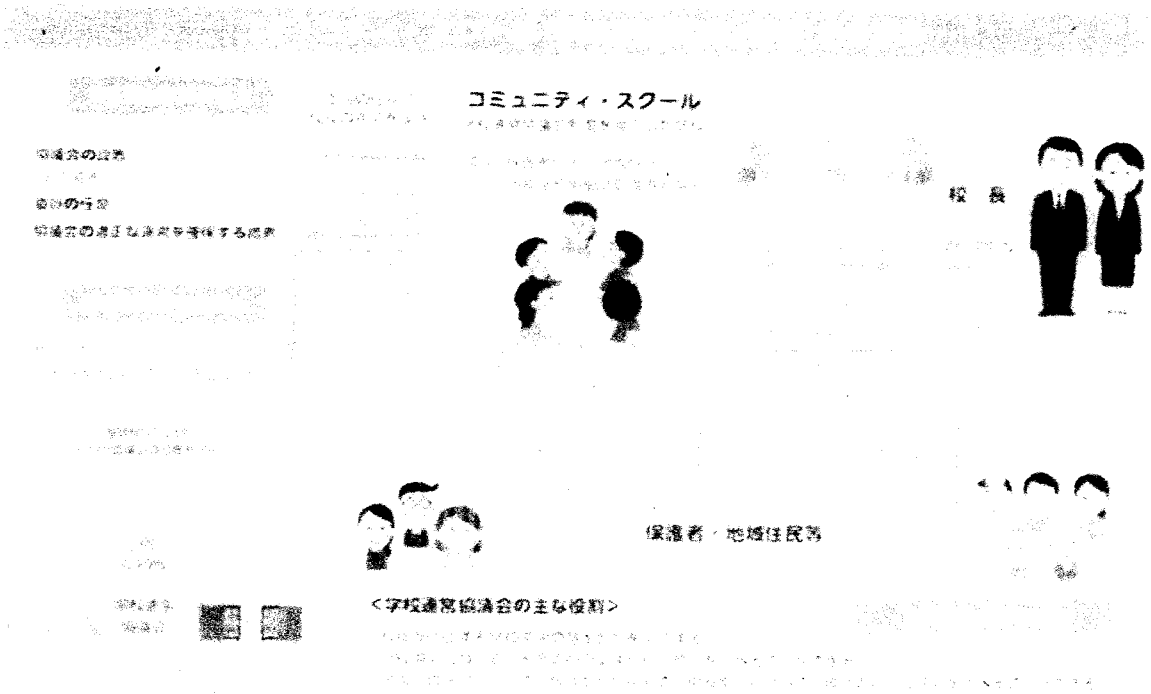
（２）先進事例：京都市立東山泉小中学校、京都教育大学附属京都小中学校（図）

義務教育９年間を「児童生徒の将来に向けてのキャリア発達及び人間形成に向けた通過期間」と捉え，キャリア教育の視点からの基礎的汎用的能力の育成を教育課程に組み入れた９年間を貫くシラバスを作成し、社会を生き抜く力の育成を図る。

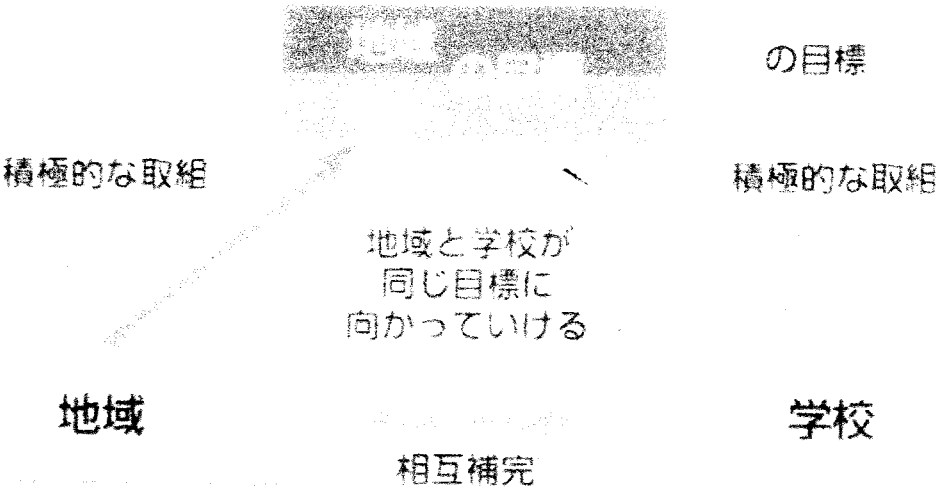


3　コミュニティ・スクール

（1）仕組み



（2）目指すこと



共通の目標が設定されると、お互いに前向きな姿勢で取り組むことができ、子供たちへの教育効果も大いに期待できます。

となって、　をしながら、それぞれが　に取り組むので
お互いに　を味わうことができます

あり方検討意見交換会（統合）

	大タイトル	タイトル	意見	理由	G	数
1	将来の学校	パラダイムシフト	常識破りのことがあってもいいのでは？牧之原市ならではのオンリーワン学校	10年後すら先の見えない時代。今まで通りの価値観では化石化していくだけでは？常識を外すくらいの気持ちで、オンリーワンの学校であってほしい	6	5
2		ICTによる主体的・探究的な学び	自分の明るい未来を想像・創造できる場であってほしい。		7	2
3	多様な人との交流ができる場		学校にさまざまな年代の人が関われる空間・時間をつくりたい。	園児、小学生、中学生、高校生、地域の大人まで、人との関わりが心を育むと思うから。 そして、新たな発見や可能性を広げることができる。	1	3
4			子どもたちと地域の人との交流を図れる場。	日頃からの地域の人へのあいさつやイベントができる場を設ける。	4	9
5		交流の場 複合施設	学校が地域の交流、余暇を充実させる場。子ども、高齢者、障害者、病気の人、みんなが学べる場になってほしい。（土日も使える）	子どもにとっても市民にとっても生きがいを感じられるまちになってほしいため。家族の会話のタネになる。	3	6
6		つながり（人と）	いろいろな人（友達、保護者、教員、地域の方）と触れ合い、関わり合いながら多くの経験（学習面・生活面）ができる学校。	これからの社会を生き抜いていく子どもたちにとっては、他と関わり、相手を尊重し認めていく心が大切であり、さまざまな体験は学びを深めたり、成長していくうえで、必要であるから。	9	1
7			勉強以外のことを学ぶ場 ・人と人のコミュニケーション ・思いやりの心 ・判断力、想像力、発想力、行動力		7	8
8		交流の場 複合施設	フラットに楽しく話し合える場	コミュニティスクールなど	3	9
9		地域に関わること 地域を守る ↓ 地域を好きになる （リターン）	・将来的に自由教育になるのでは？ ・児童数の減少により地域との交流の場がなくなる。⇒農休み	・中学生⇒学力向上 ・小学生⇒学校生活の充実	2	4
10	幼稚園から高校生までが話し合える場		異校種の生徒、児童、園児の交流の場（施設）	昔のように地域のいろいろな人が集まっていろいろ学び、成長し合いたい。もちろん、大人の交流の場としても。	1	6
11		豊かな人間関係	幼小中高など多様な人が触れ合える学校	子どもは人と人との間で育つ	7	10
12			・幼稚園・保育園間の交流があるとよい。		5	4
13			・小中連携スペースとその場を見守る人がほしい。その場で地域の人と交流ができるのもありかも。	郷土文化を知る場	5	5
14			小中学校の子どもたちが交流できる場所。	学習を教え合ったり、スポーツ（部活）を一緒に遊びながらできたら。	6	6
15		これからの学校	10～15年後 小学生と中学生、中学生と高校生といったような世代を超えてディスカッションできる時間を作れれば、考え方の幅が広がり、1人1人の主体性につながると思う。		5	2
16		つながり（人と）	学校間交流を頻繁に行う。	少子化が進んでおり、現在でもクラス替えすらない学校がある。そのことを補うため。	9	2
17	体を動かす体験・交流	豊かな自然	子どもたちが自由に遊べる場所	・危ない、きたない、そんなことしてはいけない、ということができる ・違う年齢の子が集まれる。	7	8
18			体験できる場所。何でもいいから体験できる場所がほしい。例えば木登りなど。	ダメなことをしないのではなくて、けがをしない方法などを考える場所	4	4
19			ファミリーバトミントン、グランドゴルフ等スポーツで交流できる場		6	4

あり方検討意見交換会（統合）

	大タイトル	タイトル	意見	理由	G	数
20	学校を集約する		20年後 小学校3校、中学校2校 学校が公民館的な機能を持つ ⇒高台に1校。	小学校と公民館を一緒にする。学校を使いたい。	1	1
21			10～15年後の学校のイメージ 小中一貫校のモデル校	高台開発が成功すれば、各学年2クラス化	3	8
22		1校ですべて	市街地中心の高層階の学校	通学はスクールバスで、津波・災害等から守る。	7	2
23		1校ですべて	学校が1～3校？ スクールバス。学校に自由に出入りできる。	交通網の整備は絶対！	7	3
24			学校選択制（特色ある学校づくり） 市内に3校つくる	保護者が選択できるようにする	1	3
25		これからの学校	学区制を廃止し、仮に3校に集約した場合、それぞれに個性を持たせ、選択できるようにする。		5	5
26		これからの学校	相良地区、榛原地区という旧い目線ではなく、牧之原市全体で配置を考える。		5	4
27		学校などの立地条件が心配	相良地区、榛原地区にそれぞれ、こども園、小学校、中学校が隣同士の建て方をしてほしい。	一貫校ではなく、連携という形がよい。 校舎はなるべくやや高台に、2階建て程度で避難訓練があまり必要がないように建ててほしい。	4	1
28			保幼小中高が1つにまとまった学園都市をつくる		10	1
29			相良の人たちが集まりたくなる交通環境のよいところに（バイパス付近）に学校を集める。（相良総合G）		10	2
30			牧之原に1校設置。スクールバス登校		10	3
31			小中学校の統廃合を進め、牧之原市の特色が出せる教育を行う。		1	2
32		豊かな人間関係	小中一貫教育を実現したい。	学年間をどう構成したらよいか。 けじめある学年間を望む。 交流し過ぎに注意が必要。後ろに立たれるとつらい。	7	9
33			小中一貫校を実現させる。		7	1
34			捨てていいものは何か、捨ててはいけないものは何か。箱物は（耐用年数を踏まえ）壊してください。		1	7
35	津波浸水区域を避ける		安心・安全、震災に対応できる学校を高台へ。	災害から子どもたちを守りたいから。	1	8
36			東南海地震の可能性が高まっています。津波浸水区域にある50～60年経っている古い学校は高台の安全な地域に移すべき。	子どもの大切な命は守るべき。	2	2
37		学校などの立地条件が心配	防災的に安全な場所への小中学校の集中化。津波等被害が予想される学校は内陸へ。 例：川崎小を榛原中学校の周辺に。 将来的には小中一貫校へ。空き教室は地元の公共利用スペースとして活用。		4	2

あり方検討意見交換会（統合）

	大タイトル	タイトル	意見	理由	G	数
38	地域の人が活動できる場所が校内にほしい		有効活用できる学校施設	学校と地域との垣根を低くする必要があるため。（今より）	2	4
39			・望ましい教育環境。地域の大切さをもっと考えてほしい！生まれ育った地域をもっと知ってほしい！ ・校舎内に地域の人が活動できる場所がある。逆に、地域に子どもたちが活動できる場所・イベント等がある。		2	7
40			たくさんの人と関わることができるスペース ・地域の人が自由に出入りできる公共施設（図書館、プール、老人ホーム等）を集める。その真ん中に学校がある。	・多様な価値観と触れ合わせたい。 ・地域の人とつながっていたい。	1	5
41		集まる施設	地域を大切にするため、田沼塾をやれる中央公民館と小中一貫した教育、地域の人と人のつながりを持った学校		9	4
42		交流の場 複合施設	多くの人とコミュニケーションができる学校⇒子どものコミュニケーション力の向上	ICTの進化により、人と人とのコミュニケーションをとる機会が減ってきている。「考え方」にあるように、図書館、公民館、地域の人の活動スペース等と校舎が一体となっているとコミュニケーションの機会が増えるだろう。	3	8
43	高齢者と子どもが交流できる場所		公民館、コミュニティホールとして学校を開放。 そこで、共働きの家の子どもと高齢者だけで住んでいる人との交流をしたい。	・高齢者から子どもにいろいろなことを伝える。 ・昔の遊びを伝える。 ・子ども同士の交流⇒異学年の子とけんかしたり、触れ合ったりして交流。	1	4
44			長期の休みに集まれる場所をつくりたい。 共働き、核家族が増える中、児童クラブ等に通わない児童を対象に集まれる場所。そこで、地域の人たちの力を借りていろいろな体験をさせる。	小学校4～6年生の児童クラブに通わない子どもが暇を持て余してゲームばかりになってしまう。 特に夏休みは猛暑だと外でも遊べず、学校のプールも中止で行き場がない。	4	7

あり方検討意見交換会（統合）

	大タイトル	タイトル	意見	理由	G	数
59	総合小中学校で学び、特色ある教育は地域のサテライト施設で行う		コミュニティ総合小中学校をつくる！基本は総合小中学校で学び、地域ごとの特色ある教育は地域の学校で学ぶ。（相良：塩づくり・田沼、菅山：くり、萩間：自然薯、牧之原：自然薯・お茶、川崎：静波海岸、勝間田：レタス・田んぼ、坂小：みかん・仲よし学校）	人が少なくなっても小学校の校舎は残して、地域のよさを学べる場とする。	4	1
60		ICTによる主体的・探究的な学び	少子時代に入るが、ICT等の時代に即した施設で教育。本校は、資本を集中し、社会の一部として機能させ、地域との交流はサテライト施設があればよいのではないか。	金がない、田舎だからとあきらめてしまえば、子どもたちの未来の選択を狭めかねない。	7	3
61	休日も子どもたちが遊んだり、勉強したりできる場所	学校とは別に	学校の近くに1個は勉強にも励めて、子どもが安全に遊ぶことができるスペースが必要。	図書館だけだと確かにゆっくり本を読んだり、勉強はできるが、なかなかはかどらないし、集中できない。遊びたい。親なら自分の子どもが騒いでしまって迷惑をかけてしまうなどということもあるかも。学校だけだと教師が目が届かない場所でトラブルなどが起きてしまう可能性も。	4	3
62			休日等に子どもたちが遊べる学校にしてほしい。		10	8
63	ICT環境		世界とつながる学校	牧之原市にいながらにして世界とつながることができる。いろいろな価値観に触れることで自分の生き方を考える。	3	10
64			世界につながる教育。言語、人との関わり	人口減少に伴い、視野を広げる必要性。いろいろな人や機会に触れる機会。	2	6
65		ICTによる主体的・探究的な学び	教室だけでなく、家庭でも公共施設でも学べるICT環境	オンラインで先端研究や企業とつながる	7	5
66			インターネットをつかえる	授業で分からないことを調べたいから。調べることができれば授業で困らない。	2	5
67		グローバル	牧之原にいながら世界とつながる	牧之原の自然を体験しながら、グローバルなコミュニケーションが取れる	3	3
68		施設	各教室Wi-Fi完備		5	11
69		牧之原大好き！⇒発信	人・もの・こと 新しいシステムに対応する（ICTの導入・活用）	電子黒板・教科書・タブレット等世の中は常に進化・変化していく。地方は動向は知っていても対応は遅れがち。なるべく世の中を反映させていく。	8	8
70	勉強は家庭、学校は遊んだり対話する場所になるのでは	集まる施設	学校は、10～15年後存続するのか。AIが進み、家庭で学習する。学校は週1くらい集まり、コミュニケーションづくりと対話の場所になるのではないか。通学したら楽しい場所が学校になればいいし、人員が減っても週1なので広い校舎もいらない。ただし、広い運動場や体育館は必要。思い切り遊べる場所づくりの学校。		9	5
71			楽しい場所、対話、遊べるスペース ⇒人間力 勉強は家庭		9	6
72	プール		市民プールを土日有料開放		4	3
73			学生以外も使えるプール	地元のコミュニケーションの場となる	4	6
74			プールや図書館などの施設の市営化	管理を外部組織にすることで教師負担を減らす。施設が充実する。	6	10

あり方検討意見交換会（統合）

	大タイトル	タイトル	意見	理由	G	数
75	屋外施設	施設	全天候型グラウンド	運動会等の行事で、雨天で土日の動きが左右される。せっかく新校舎になるときはグラウンドまで配慮を！	5	12
76			野球場がほしい		10	10
77			もし学校が移転するなら跡地に牧之原の人が集まりたくなるような場所を！ 芝のサッカーグラウンドをつくる。		10	11
78	学級数	地域との関わり	あたたかな給食を食べることができる		5	9
79		子どもが将来社会で生きていくために、教育現場に大人が立ち入る	・クラス替えで新しい友達との出会いを。 ・農業等、海のこと、工場のことなど教えてくれる人がいるといい。地域を小学校区でなく、市全体で捉えられるといい。	・大勢の子どもがいて、大勢の大人に囲まれた社会が学校にあるといい。 ・一人の子どもに大勢の大人が後ろにいてくれるといい。（関わる）	5	8
80		単学級はやめて	中学校は2つ。（相良中・榛原中）牧中は申し訳ありません。小学校は4つ（各中学校に2つの小学校）	小学校の単学級化をなくすことで、たくさんの人間関係を学ぶことができる	7	4
81		単学級はやめて	クラス替えをして新しい友達をつくれる学校	ずっと一緒では、新しい友達がつくれない	7	5
82		単学級はやめて	1学年1クラスがずっと続くとなった場合、同じ環境で過ごすことにメリットもあればデメリットもあると思う。 一緒にいる友達や学びたいものが選択できなくなってしまったら、すごく窮屈だと思う。 そうなると市内・県外へ進学・就職したい人が増えるかもしれない。自分で選択していける教育環境があればよいと思う。		7	6
83			いろいろな人たちと関わることができる学校になってほしい	子どもたちのコミュニケーション能力を高めたい。小さい学校だとコミュニケーションの幅が狭くなってしまうため、地域の人たちと関わる場も必要	1	4
84			生徒数を補うためにも、いろいろな文化を持った人たち（外国人）が交流できる場があったらいいと思う。	コミュニケーション能力が高められる。	1	5
85			生徒一人一人に目が届く学校	いじめ、不登校が年々増えてきている。集約してマンモス校をつくるのではなく、ほどよい人数にしてほしい。	2	1
86		これからの学校	1学級20～24人程度。世界一の学校、フィンランドの教育を参考。	・子ども一人一人丁寧な指導がいきわたる人数 ・大人数だと、誰かが言うだろう、やるだろうの意識が人間として働く。少人数なことで「自分がやらなければ！」の意識が働く。	5	6
87	プログラム	子どもが将来社会で生きていくために、教育現場に大人が立ち入る	子どもがこれからの社会で生きていくため、社会からのフィードバックをできる限り子どもに与えたいので、大人の職業体験、職業の知恵、小中学生に情報を与える機会や仕組み、プログラムをつくりたい。		5	7
88		つながり（地域と）	地域と密着した活動を9年間の学びの中で必ず体験させる。カリキュラムを取り入れる。（小中一貫・キャリア教育）	牧之原市のもっとも優れた特色ある教育は、地域との連携（つながり）なので、それを市内のどの子にも体験・経験させたいから。	9	3
89		ICTによる主体的・探究的な学び	学習者主体の学び。企業や校種の垣根なく。	自分の興味を探究できる学校。（高校との連携・NPOや企業との連携	7	1

あり方検討意見交換会（統合）

	大タイトル	タイトル	意見	理由	G	数
90	地域が学校に関わり体験できる場をつくる	地域力	地元企業の力	地域とは住民だけでなく、地元の企業も含む。市の未来人財育成の視点で。	6	4
91			地域の人が先生となって、子どもと共に活動できる学習内容。 例：生産活動、地域のよさを知るなど		3	6
92		地域との関わり	地域の人に地域のことを教えてもらえる学校	地域のよさは地域の人から直接話を聞いて初めて実感でき地域を好きになれる。	5	8
93		地域力	地域の文化を守り、安心安全で文化の香りを創出する学校	今のままでは少子化がどんどん進んでしまう。市の施策として子育ての時期に牧之原市に住みたいと思える具体をもっと出してほしい。統合することがよいこととは思わない。地域には地域のよさがあり、そのよさを地域と学校が共有することが大切。	6	1
94		地域力	地域との関わりを残す	地域の歴史・文化を学ぶことがアイデンティティや地域愛につながる。	6	2
95		牧之原大好き！ ⇒発信	学校の統廃合は時代の流れかな。統合後でも地域とのつながりを忘れない教育を。地域の組織の統合とならないように。理想と現実の差があっては困るのでは…。		8	4
96		牧之原大好き！ ⇒発信	集約された学校の基本目標を学校だけでなく、地域全体で共有化していく必要があるのでは。		8	5
97		牧之原大好き！ ⇒発信	人・もの・こと 牧之原市でしかできない学びがある。各学校で行われている特色ある教育がなくなることなく、もっと地域がより参入し学校がより開放的になることで深まることを期待。	牧之原市っていいな～と思う子を育てていきたい。	8	6
98		牧之原大好き！ ⇒発信	人・もの・こと 牧之原市を愛する人（郷土人）【地方】、中央のことをよく知る物知りな人【最先端】、地域に還元している人	子どもの将来のお手本になるような人が学びに関わることで、牧之原市の学びや将来につなげる	8	7
99		地域力	地域の人たちと一緒に遊び心いっぱいの学校	学校は子どもたちだけの学び場ではない。地域と共にたくさんの人が関わり、学び合える場でありたい。その中で子どもたちが自己実現させていけるような学校でありたい。それが、社会に開かれた学校では？	6	3
100			・地域の人と交流できる場 ・農産業の手伝い。自然を通してコミュニケーションできる場	校内だけでは足りない体験、交流ができる	1	1
101			①読み聞かせ ②野菜を育てる	①戦争の話など聴きたい。 ②おじいちゃん、おばあちゃんに教えてもらう。	3	3
102			・絵本の読み聞かせのボランティアはずっと必要だと思う。		5	3
103			勝小が誇る「きらり農園」の継続。	学校の人たちと地域の人たちとで、一緒にとうもろこし、落花生、夏野菜などを作って、収穫を祝い、料理していただくことを続けていきたい。 食に関することはもちろん、自然の恵み、感謝の気持ち、そして地域や学校へ愛着を持たせたい。	3	4
104			・田植えから刈取り、もちつきまで農作業の仕組み ・お茶のできる仕組み等地域との関わり	地域の事業は大人になっても覚えている	4	5
105			もちつき、米作りから教えたい。しめ縄づくりもできる。	新しい材質等で生産されているさまざまなものを自分の手で加工し、その物づくりの手法を残したい。	5	1

あり方検討意見交換会（統合）

	大タイトル	タイトル	意見	理由	G	数
106	地域が学校に関わり体験できる場をつくる		・地域の人との野菜づくり ・地域の場所を使っての通学合宿 ・中学生と小学生の交流の場 ・自分の意見を言えるようになる授業があるとよい。		5	2
107			一人の子どもに大勢の大人が関わって育ててもらいたい。 米作り、野菜作り、自動車、PC、外国語学の先生、歴史等		7	7
108		地域との関わり	地域の人のご厚意で日頃体験できないことをしてもらえる環境を残したい。	・畑を借りて、じゃがいも・さつまいも等の収穫。 ・幼稚園内にあるは田んぼや畑を使っての作業。（土ならし等も含む） ・地域の人たちの協力で自分たちがつくったじゃがいもなどを自分たちでいただく。 ・子どもの遊びもできる	5	7
109			小学校で農業体験、中学校で職業体験を計画的に行う。	・地域の特産物を知り、将来の可能性を考える機会。 ・新たな職業にも目を向けさせたい。	6	1
110			職場体験+農業体験・地域清掃	牧之原市特有の仕事（魅力）を伝える。地元のいいところ。 外に出かけていろいろなものを見る・知る。場所へ行く。	6	2
111		つなげていく	牧之原ならではの農業、産業、自然をたくさん体験してほしい。	自宅や塾での学習等、知識を身につけるだけではなく、実際の体験ができるとよい。家庭ではなかなか体験が難しいため。	3	1
112		つなげていく	住んでいる地域の特色ある体験	地元のよさを知る。資源を知る。継続的にやっていく。	3	2
113	軒先運動の継続	地域に関わること 地域を守る ↓ 地域を好きになる （リターン）	軒先運動を続けたい。	学区が広くなっても、子どもたちは毎日登下校する。安全対策は必要。 （いつになっても）	2	3
114			子どもたちの登下校の見守りを続けてほしい。 朝や帰りに通学路に立って子どもたちを見守り、横断歩道を渡る時は旗をもっていただく。	教員が見切れない登下校の様子を伝えてくれて助かる。子どもたちが安全にと下校できる。	4	8
115	地域が主体の学び	パラダイムシフト	市民のパラダイムシフト	固定概念を無くし、市民、地域が子どもを育てる仕組みが必要	6	6
116			子どもの社会力が育つ場づくり 土日のあり方を具体的に考えたい。 教育課程と地域の力、人、文化をどうかかわらせるか。	学校週5日制発足時は、学校と社会、地域の連携が叫ばれたが、ほぼ実現できなかったので、今取り戻したい。	6	7
117			地域の行事（いいものは残したい） ・お祭り・区民大会・校内運動会（住民参加）・スポーツ少年団		3	5
118			地域全体で子どもを育てる仕組み ・防災訓練・祭・キャリア教育・まちのはら	まずは市民の意識改革（パラダイムシフト） 学力だけでなく、人間力を育てるためには、多様な考えが必要だから。	4	6
119			高尾山の仲よし学校	1～6年生の縦割り。コミュニケーションでつながっている。	4	4
120			地域での取組。 地域が主体となることは考えないでほしい。（学校との目標化）		3	1
121			地域の負担を考えて学校をつくる。		3	2
122			勝間田地区の行事 （勝間田城址祭、みやまつつじ祭、ゆうゆうランドの活用、通学合宿、みやま農園）	地域の伝統、歴史の勉強	6	3

あり方検討意見交換会（統合）

	大タイトル	タイトル	意見	理由	G	数
123	自治会活動	自治会残す活動	自治会は、小学校区の10区で今までの歴史・文化・伝統を大切に今まで通り、次回は10区で活動する。		9	7
124	さまざまな教育	人間力	学力・専門性のある学校 空港を利用した学校		6	9
125			学校管理に地域雇用を増やす		10	4
126		地域に関わること 地域を守る ↓ 地域を好きになる （リターン）	向こう三軒両隣が分かる教育		2	1
127			全国区に出て、故郷に戻る気持ちを育成		2	2
128			都会と同じような教育を受けられる環境。	牧之原市では、「質の高い教育ができない」「就職できない」という理由ですばらしい人材を流出したくないから。	1	6
129			子どもたちが夢を持てる場所。本物に触れる。	主体性、意欲。 学ぶ必要感、学ぶ喜びを感じる。	2	9
130		人間力	コミュニケーション力の向上	現代では、スマートフォン、SNSなどによって対人的な関わりが減っているから。	6	7
131		人間力	主体性、積極性のある人材の育成	地域との交流に積極的に参加する	6	8
132		今後の教育	学校生活の中で、一つのことに時間を掛け、努力して達成感を味わえるような行事（イベント）がほしい。	本当に「身のある教育」とは何か？ 学力をつける場ではない。体験が大事。 子どものための教育とは、レールを敷くことなのか、たくさんの体験を積むことなのか？	2	6
133		未来の予想が実現したにように考えて行くことも必要	10～15年後の学校 ①少子化により人数が10人程度になっても地域のみなさんが協力して人間形成ができるような学校（静岡市大川小のような） ②親孝行できる教育（地域及び牧之原市の人口減少に歯止めを） ③英語教育は高学年から始めてほしい（日本語を大切に） ④少子化に対する対策を考えていただきたい。 ⑤小中一貫の前に幼保一貫教育の徹底。		8	9
134		これからの学校	小学校から中学校までの小中一貫教育は無理な感じがします。6～8歳、12～15歳は子どもと大人の差。中高一貫の方が合理的。ただし、高校は義務教育ではないのが…。		5	3

あり方検討意見交換会（統合）

	大タイトル	タイトル	意見	理由	G	数
135	さまざまな教育	今後の教育	学校の中で「公平」を作りだす手立てがたくさんほしい。 ・外国人のサポート（ﾊﾞｲﾘﾝｶﾞﾙ） ・支援を必要とする子のサポート（支援員）等	これからの社会のキーワードは「共に生きる」ことではないか。年齢構成の単純な変化だけではなく、その人たちが抱えているさまざまな「困り感」「事情」も変わってきている。 多様な人を受け入れるコミュニティと少しでも同じ立場で接することができる社会をつくりたい。	2	5
136			誰でも通える学校。幼、小、中、高など決めずに一生学べる。	多様性。学びは大学までではない。	3	7
137		交流の場 複合施設	誰でも学び合える学校	知識だけなく、いろいろな人の知恵をお互いに学び合う。 卒業がない。いつでも学び直せる。	3	7
138			学びって楽しいなを感じる学校	新しいことを知る喜びを持たせる学校教育※学校はなくさない。	3	9
139			学校に行くと楽しいことがある。 ・今日は体育がある。 ・友達と話すのが楽しい等	子どもたちが学校へ行く意義が持てることが大事。勉強することも大事だが、それ以外のことも重要な時代になっているのかもしれない。	7	9
140		みんなで楽しく!! 年代を超えた交流	みんなが集まって楽しく遊べる学校	楽しいことは能力を伸ばしてくれる。保、小、中、高校、住民が集うことができる学校	8	1
141			小中高合同の学園祭	違う世代との交流を図る	8	2
142			各地域出身の生徒で祭を運営する	創造力、アイデア、団体行動、交渉力を身につけられる。優秀な地域は表彰される。	8	3
143			子どもがつくったものを、「こども道の駅」で売る。	キャリア教育	4	2
144			・コミュニケーションを取るのが苦手な子、軽い発達障害がある子には細やかな定期サポートをしてくれる人が必要。 ・異年齢での交流を定期的に。		5	6
145			いつでもくじけない心が必要。	これがあれば何でもできる。最後にはこれで決まる。	6	5
146		ICTによる主体的・探究的な学び	地域と学校が意見を共有して進めるときに、子どもの権利を代弁する者は必ずほしい。		7	4
147			子どもたちが出したアイデアをどれだけ地域が吸い上げられるか！		2	8
148		豊かな自然	海を利用した授業	海の怖さ、楽しさを教える。先生が大変だけど、ライフセーバー監視のもと。危険を知ることも大事。	7	7
149	その他		庁舎は2ついらない。1つにしてください。		1	9

10/2あり方検討意見交換会（榛原）

G	数	タイトル	意見	理由
1	1		20年後 小学校3校、中学校2校 学校が公民館的な機能を持つ ⇒高台に1校。	小学校と公民館を一緒にする。学校を使いたい。
1	2		20年後の学校 ・高齢者が多くなる社会で学校は空き教室ばかり増える。 ・学校の一部を年寄りのデイサービス化する。	・子どもたちに年寄りを敬う気持ちと会議の大切さを学ばせる。 ・年寄りは生きた教材。
1	3		学校にさまざまな年代の人が関われる空間・時間をつくりたい。	園児、小学生、中学生、高校生、地域の大人まで、人との関わりが心を育むと思うから。 そして、新たな発見や可能性を広げることができる。
1	4		公民館、コミュニティホールとして学校を開放。 そこで、共働きの家の子どもと高齢者だけで住んでいる人との交流をしたい。	・高齢者から子どもにいろいろなことを伝える。 ・昔の遊びを伝える。 ・子ども同士の交流⇒異学年の子とけんかしたり、触れ合ったりして交流。
1	5		たくさんの人と関わることができるスペース ・地域の人が自由に出入りできる公共施設（図書館、プール、老人ホーム等）を集める。その真ん中に学校がある。	・多様な価値観と触れ合わせたい。 ・地域の人とつながっていたい。
1	6		異校種の生徒、児童、園児の交流の場（施設）	昔のように地域のいろいろな人が集まっていろいろ学び、成長し合いたい。もちろん、大人の交流の場としても。
2	1	地域に関わること 地域を守る ↓ 地域を好きになる （リターン）	向こう三軒両隣が分かる教育	
2	2		全国区に出て、故郷に戻る気持ちを育成	
2	3		軒先運動を続けたい。	学区が広くなっても、子どもたちは毎日登下校する。安全対策は必要。 （いつになっても）
2	4		・将来的に自由教育になるのでは？ ・児童数の減少により地域との交流の場がなくなる。⇒農休み	・中学生⇒学力向上 ・小学生⇒学校生活の充実

10/2あり方検討意見交換会（榛原）

G	数	タイトル	意見	理由
2	5	今後の教育	学校の中で「公平」を作りだす手立てがたくさんほしい。 ・外国人のサポート（ﾊﾞｲﾘﾝｶﾞﾙ） ・支援を必要とする子のサポート（支援員）等	これからの社会のキーワードは「共に生きる」ことではないか。年齢構成の単純な変化だけではなく、その人たちが抱えているさまざまな「困り感」「事情」も変わってきている。 多様な人を受け入れるコミュニティと少しでも同じ立場で接することができる社会をつくりたい。
2	6		学校生活の中で、一つのことに時間を掛け、努力して達成感を味わえるような行事（イベント）がほしい。	本当に「身のある教育」とは何か？ 学力をつける場ではない。体験が大事。 子どものための教育とは、レールを敷くことなのか、たくさんの体験を積むことなのか？
3	1		地域での取組。 地域が主体となることは考えないでほしい。（学校との目標化）	
3	2		地域の負担を考えて学校をつくる。	
3	3		①読み聞かせ ②野菜を育てる	①戦争の話など聴きたい。 ②おじいちゃん、おばあちゃんに教えてもらう。
3	4		勝小が誇る「きらり農園」の継続。	学校の人たちと地域の人たちとで、一緒にとうもろこし、落花生、夏野菜などを作って、収穫を祝い、料理していただくことを続けていきたい。 食に関することはもちろん、自然の恵み、感謝の気持ち、そして地域や学校へ愛着を持たせたい。
3	5		地域の行事（いいものは残したい） ・お祭り・区民大会・校内運動会（住民参加）・スポーツ少年団	
3	6		地域の人が先生となって、子どもと共に活動できる学習内容。 例：生産活動、地域のよさを知るなど	
3	7		誰でも通える学校。幼、小、中、高など決めずに一生学べる。	多様性。学びは大学まででではない。
3	8		10～15年後の学校のイメージ 小中一貫校のモデル校	高台開発が成功すれば、各学年2クラス化
3	9		学びって楽しいなを感じる学校	新しいことを知る喜びを持たせる学校教育※学校はなくさない。

10/2あり方検討意見交換会（榛原）

G	数	タイトル	意見	理由
3	10		世界とつながる学校	牧之原市にいながらにして世界とつながることができる。いろいろな価値観に触れることで自分の生き方を考える。
4	1		コミュニティ総合小中学校をつくる！基本は総合小中学校で学び、地域ごとの特色ある教育は地域の学校で学ぶ。（相良：塩づくり・田沼、菅山：くり、萩間：自然薯、牧之原：自然薯・お茶、川崎：静波海岸、勝間田：レタス・田んぼ、坂小：みかん・仲よし学校）	人が少なくなっても小学校の校舎は残して、地域のよさを学べる場とする。
4	2		子どもがつくったものを、「こども道の駅」で売る。	キャリア教育
4	3		市民プールを土日有料開放	
4	4		高尾山の仲よし学校	1～6年生の縦割り。コミュニケーションでつながっている。
4	5		・田植えから刈取り、もちつきまで農作業の仕組み ・お茶のできる仕組み等地域との関わり	地域の事業は大人になっても覚えている
4	6		地域全体で子どもを育てる仕組み ・防災訓練・祭・キャリア教育・まちのはら	まずは市民の意識改革（パラダイムシフト） 学力だけでなく、人間力を育てるためには、多様な考えが必要だから。
4	7		長期の休みに集まれる場所をつくりたい。 共働き、核家族が増える中、児童クラブ等に通わない児童を対象に集まれる場所。そこで、地域の人たちの力を借りていろいろな体験をさせる。	小学校4～6年生の児童クラブに通わない子どもが暇を持て余してゲームばかりになってしまう。 特に夏休みは猛暑だと外でも遊べず、学校のプールも中止で行き場がない。
4	8		子どもたちの登下校の見守りを続けてほしい。 朝や帰りに通学路に立って子どもたちを見守り、横断歩道を渡る時は旗をもっていただく。	教員が見切れない登下校の様子を伝えてくれて助かる。子どもたちが安全にと下校できる。
4	9		子どもたちと地域の人との交流を図れる場。	日頃からの地域の人へのあいさつやイベントができる場を設ける。
5	1		もちつき、米作りから教えたい。しめ縄づくりもできる。	新しい材質等で生産されているさまざまなものを自分の手で加工し、その物づくりの手法を残したい。
5	2		・地域の人との野菜づくり ・地域の場所を使っての通学合宿 ・中学生と小学生の交流の場 ・自分の意見を言えるようになる授業があるとよい。	
5	3		・絵本の読み聞かせのボランティアはずっと必要だと思う。	
5	4		・幼稚園・保育園間の交流があるとよい。	

10/2あり方検討意見交換会（榛原）

G	数	タイトル	意見	理由
5	5		・小中連携スペースとその場を見守る人がほしい。その場で地域の人と交流ができるのもありかも。	郷土文化を知る場
5	6		・コミュニケーションを取るのが苦手な子、軽い発達障害がある子には細やかな定期サポートをしてくれる人が必要。 ・異年齢での交流を定期的に。	
5	7	子どもが将来社会で生きていくために、教育現場に大人が立ち入る	子どもがこれからの社会で生きていくため、社会からのフィードバックをできる限り子どもに与えたいので、大人の職業体験、職業の知恵、小中学生に情報を与える機会や仕組み、プログラムをつくりたい。	
5	8		・クラス替えで新しい友達との出会いを。 ・農業等、海のこと、工場のことなど教えてくれる人がいるといい。地域を小学校区でなく、市全体で捉えられるといい。	・大勢の子どもがいて、大勢の大人に囲まれた社会が学校にあるといい。 ・一人の子どもに大勢の大人が後ろにいてくれるといい。（関わる）
5	9		全部一か所集中複合施設 ・保幼小中高、老人ホーム、図書館、体育館、ショッピングセンター、い～らのようなホール、公園等	教育は連携しやすく、駐車場ばっちり。市民の集まりやすい環境で津波なしのところ。 人がいるところは低いところ、でも理想は高台？広い土地あるか？遠い人もいる。
6	1		小学校で農業体験、中学校で職業体験を計画的に行う。	・地域の特産物を知り、将来の可能性を考える機会。 ・新たな職業にも目を向けさせたい。
6	2		職場体験+農業体験・地域清掃	牧之原市特有の仕事（魅力）を伝える。地元のいいところ。 外に出かけていろいろなものを見る・知る。場所へ行く。
6	3		勝間田地区の行事 （勝間田城址祭、みやまつつじ祭、ゆうゆうランドの活用、通学合宿、みやま農園）	地域の伝統、歴史の勉強
6	4		ファミリーバトミントン、グランドゴルフ等スポーツで交流できる場	
6	5		いつでもくじけない心が必要。	これがあれば何でもできる。最後にはこれで決まる。
6	6		小中学校の子どもたちが交流できる場所。	学習を教え合ったり、スポーツ（部活）を一緒に遊びながらできたら。
6	7		子どもの社会力が育つ場づくり 土日のあり方を具体的に考えたい。 教育課程と地域の力、人、文化をどうかかわらせるか。	学校週5日制発足時は、学校と社会、地域の連携が叫ばれたが、ほぼ実現できなかったので、今取り戻したい。

10/2あり方検討意見交換会(榛原)

G	数	タイトル	意見	理由
7	1	ICTによる主体的・探究的な学び	学習者主体の学び。企業や校種の垣根なく。	自分の興味を探究できる学校。(高校との連携・NPOや企業との連携
7	2		自分の明るい未来を想像・創造できる場であってほしい。	
7	3		少子時代に入るが、ICT等の時代に即した施設で教育。本校は、資本を集中し、社会の一部として機能させ、地域との交流はサテライト施設があればよいのではないか。	金がない、田舎だからとあきらめてしまえば、子どもたちの未来の選択を狭めかねない。
7	4		地域と学校が意見を共有して進めるときに、子どもの権利を代弁する者は必ずほしい。	
7	5		教室だけでなく、家庭でも公共施設でも学べるICT環境	オンラインで先端研究や企業とつながる
7	6	図書による学び	図書室(勉強スペース)今よりもたくさんの本と出会いがほしい	本から学ぶものが多いから。想像力、読解力など
7	7	豊かな自然	海を利用した授業	海の怖さ、楽しさを教える。先生が大変だけど、ライフセーバー監視のもと。危険を知ることも大事。
7	8		子どもたちが自由に遊べる場所	・危ない、きたない、そんなことしてはいけない、ということができる ・違う年齢の子が集まれる。
7	9	豊かな人間関係	小中一貫教育を実現したい。	学年間をどう構成したらよいか。 けじめある学年間を望む。 交流し過ぎに注意が必要。後ろに立たれるとつらい。
7	10		幼小中高など多様な人が触れ合える学校	子どもは人と人との間で育つ

10/4あり方検討意見交換会（相良）

G	数	タイトル	意見	理由
1	1		・地域の人と交流できる場 ・農産業の手伝い。自然を通してコミュニケーションできる場	校内だけでは足りない体験、交流ができる
1	2		小中学校の統廃合を進め、牧之原市の特色が出せる教育を行う。	
1	3		学校選択制（特色ある学校づくり） 市内に3校つくる	保護者が選択できるようにする
1	4		いろいろな人たちと関わることができる学校になってほしい	子どもたちのコミュニケーション能力を高めたい。小さい学校だとコミュニケーションの幅が狭くなってしまうため、地域の人たちと関わる場も必要
1	5		生徒数を補うためにも、いろいろな文化を持った人たち（外国人）が交流できる場があったらいいと思う。	コミュニケーション能力が高められる。
1	6		都会と同じような教育を受けられる環境。	牧之原市では、「質の高い教育ができない」「就職できない」という理由ですばらしい人材を流出したくないから。
1	7		捨てていいものは何か、捨ててはいけないものは何か。箱物は（耐用年数を踏まえ）壊してください。	
1	8		安心・安全、震災に対応できる学校を高台へ。	災害から子どもたちを守りたいから。
1	9		庁舎は2ついらない。1つにしてください。	
2	1		生徒一人一人に目が届く学校	いじめ、不登校が年々増えてきている。集約してマンモス校をつくるのではなく、ほどよい人数にしてほしい。
2	2		東南海地震の可能性が高まっています。津波浸水区域にある50～60年経っている古い学校は高台の安全な地域に移すべき。	子どもの大切な命は守るべき。
2	3		10～15年後の学校デザイン（牧之原市全体で280名） 牧之原榛原地区学校（相良にもう1校） ・幼稚園・保育園、小中学校をまとめて教育する学校をつくる。 ・その中には、地域のコミュニティセンターも存在する。 ・外国人に日本語を教育する日本語学校もある。 ・遠くから通学する学生には、スクールバスを活用する。 ・介護施設も設置する。	
2	4		有効活用できる学校施設	学校と地域との垣根を低くする必要があるため。（今より）
2	5		インターネットをつかえる	授業で分からないことを調べたいから。調べることができれば授業で困らない。

G	数	タイトル	意見	理由
2	6		世界につながる教育。言語、人との関わり	人口減少に伴い、視野を広げる必要性。いろいろな人や機会に触れる機会。
2	7		・望ましい教育環境。地域の大切さをもっと考えてほしい！生まれ育った地域をもっと知ってほしい！ ・校舎内に地域の人が活動できる場所がある。逆に、地域に子どもたちが活動できる場所・イベント等がある。	
2	8		子どもたちが出したアイデアをどれだけ地域が吸い上げられるか！	
2	9		子どもたちが夢を持てる場所。本物に触れる。	主体性、意欲。 学ぶ必要感、学ぶ喜びを感じる。
3	1	つなげていく	牧之原ならではの農業、産業、自然をたくさん体験してほしい。	自宅や塾での学習等、知識を身につけるだけではなく、実際の体験ができるとよい。家庭ではなかなか体験が難しいため。
3	2		住んでいる地域の特色ある体験	地元のよさを知る。資源を知る。継続的にやっていく。
3	3	グローバル	牧之原にいながら世界とつながる	牧之原の自然を体験しながら、グローバルなコミュニケーションが取れる
3	4	交流の場 複合施設	地域の老人の憩いの場を設ける	老人とのふれあい
3	5		大きな図書館と学校が一緒になった施設を造る（図書館にはさまざまな学習スペースや分かれた場所がある）	子どもたちが他人に遠慮なく読書できるといい。
3	6		学校が地域の交流、余暇を充実させる場。子ども、高齢者、障害者、病気の人、みんなが学べる場になってほしい。（土日も使える）	子どもにとっても市民にとっても生きがいを感じられるまちになってほしいため。家族の会話のタネになる。
3	7		誰でも学び合える学校	知識だけなく、いろいろな人の知恵をお互いに学び合う。 卒業がない。いつでも学び直せる。
3	8		多くの人とコミュニケーションができる学校⇒子どものコミュニケーション力の向上	ICTの進化により、人と人とのコミュニケーションをとる機会が減ってきている。「考え方」にあるように、図書館、公民館、地域の人の活動スペース等と校舎が一体となっているとコミュニケーションの機会が増えるだろう。
3	9		フラットに楽しく話し合える場	コミュニティスクールなど

G	数	タイトル	意見	理由
4	1	学校などの立地条件が心配	相良地区、榛原地区にそれぞれ、こども園、小学校、中学校が隣同士の建て方をしてほしい。	一貫校ではなく、連携という形がよい。 校舎はなるべくやや高台に、2階建て程度で避難訓練があまり必要がないように建ててほしい。
4	2		防災的に安全な場所への小中学校の集中化。津波等被害が予想される学校は内陸へ。 例：川崎小を榛原中学校の周辺に。 将来的には小中一貫校へ。空き教室は地元の公共利用スペースとして活用。	
4	3	学校とは別に	学校の近くに1個は勉強にも励めて、子どもが安全に遊ぶことができるスペースが必要。	図書館だけだと確かにゆっくり本を読んだり、勉強はできるが、なかなかはかどらないし、集中できない。遊びたい。 親なら自分の子どもが騒いでしまって迷惑をかけてしまうなどということもあるかも。学校だけだと教師が目が届かない場所でトラブルなどが起きてしまう可能性も。
4	4		体験できる場所。何でもいいから体験できる場所がほしい。例えば木登りなど。	ダメなことをしないのではなくて、けがをしない方法などを考える場所
4	5		図書館を中心に、周りに小学校、中学校、高校、相良城（史料館）がある。史料館は学び直し学校として公民館的に活用。旧市庁舎は1階は老人ホーム・ケアセンター、2階は幼保園。	
4	6		学生以外も使えるプール	地元のコミュニケーションの場となる
4	7		学校に近い場所に大きな図書館	・本から学べることが多いから。 ・地域の人も入れるし、子どもたちも入れるので、そこでコミュニケーションが取れる。 ・勉強ができるスペースも…。

G	数	タイトル	意見	理由
5	1	これからの学校	1校にまとめて公的な通学手段を整える。3校つくる案とコストの比較をして、可能性を考えてみる。 図書館と文化ホールなどの文化施設と合体させ文化ゾーンとする。	
5	2		10～15年後 小学生と中学生、中学生と高校生といったような世代を超えてディスカッションできる時間を作れれば、考え方の幅が広がり、1人1人の主体性につながると思う。	
5	3		小学校から中学校までの小中一貫教育は無理な感じがします。6～8歳、12～15歳は子どもと大人の差。中高一貫の方が合理的。ただし、高校は義務教育ではないのが…。	
5	4		相良地区、榛原地区という旧い目線ではなく、牧之原市全体で配置を考える。	
5	5		学区制を廃止し、仮に3校に集約した場合、それぞれに個性を持たせ、選択できるようにする。	
5	6		1学級20～24人程度。世界一の学校、フィンランドの教育を参考。	・子ども一人一人丁寧な指導がいきわたる人数 ・大人数だと、誰かが言うだろう、やるだろうの意識が人間として働く。少人数なことで「自分がやらなければ！」の意識が働く。
5	7	地域との関わり	地域の人のご厚意で日頃体験できないことをしてもらえる環境を残したい。	・畑を借りて、じゃがいも・さつまいも等の収穫。 ・幼稚園内にあるは田んぼや畑を使っての作業。（土ならし等も含む） ・地域の人たちの協力で自分たちがつくったじゃがいもなどを自分たちでいただく。 ・子どもの遊びもできる
5	8		地域の人に地域のことを教えてもらえる学校	地域のよさは地域の人から直接話を聞いて初めて実感でき地域を好きになれる。
5	9		あたたかな給食を食べることができる	
5	10	施設	地域の人々がさまざまな目的やイベントで集まれるような複合施設をつくってほしい（例：島田ローズアリーナ）	
5	11		各教室Wi-Fi完備	
5	12		全天候型グラウンド	運動会等の行事で、雨天で土日の動きが左右される。せっかく新校舎になるときはグラウンドまで配慮を！

G	数	タイトル	意見	理由
6	1	地域力	地域の文化を守り、安心安全で文化の香りを創出する学校	今のままでは少子化がどんどん進んでしまう。市の施策として子育ての時期に牧之原市に住みたいと思える具体をもっと出してほしい。統合することがよいこととは思わない。地域には地域のよさがあり、そのよさを地域と学校が共有することが大切。
6	2		地域との関わりを残す	地域の歴史・文化を学ぶことがアイデンティティや地域愛につながる。
6	3		地域の人たちと一緒に遊び心いっぱいの学校	学校は子どもたちだけの学び場ではない。地域と共にたくさんの人が関わり、学び合える場でありたい。その中で子どもたちが自己実現させていけるような学校でありたい。それが、社会に開かれた学校では？
6	4		地元企業の力	地域とは住民だけでなく、地元の企業も含む。市の未来人財育成の視点で。
6	5	パラダイムシフト	常識破りのことがあってもいいのでは？牧之原市ならではのオンリーワン学校	10年後すら先の見えない時代。今まで通りの価値観では化石化していくだけでは？常識を外すくらいの気持ちで、オンリーワンの学校であってほしい
6	6		市民のパラダイムシフト	固定概念を無くし、市民、地域が子どもを育てる仕組みが必要
6	7	人間力	コミュニケーション力の向上	現代では、スマートフォン、SNSなどによって対人的な関わりが減っているから。
6	8		主体性、積極性のある人材の育成	地域との交流に積極的に参加する
6	9		学力・専門性のある学校 空港を利用した学校	
6	10		プールや図書館などの施設の市営化	管理を外部組織にすることで教師負担を減らす。施設が充実する。
7	1		小中一貫校を実現させる。	
7	2	1校ですべて	市街地中心の高層階の学校	通学はスクールバスで、津波・災害等から守る。
7	3		学校が1～3校？ スクールバス。学校に自由に出入りできる。	交通網の整備は絶対！

G	数	タイトル	意見	理由
7	4	単学級はやめて	中学校は2つ。(相良中・榛原中)牧中は申し訳ありません。小学校は4つ(各中学校に2つの小学校)	小学校の単学級化をなくすことで、たくさんの人間関係を学ぶことができる
7	5		クラス替えをして新しい友達をつくれる学校	ずっと一緒では、新しい友達がつくれない
7	6		1学年1クラスがずっと続くとなった場合、同じ環境で過ごすことにメリットもあればデメリットもあると思う。 一緒にいる友達や学びたいものが選択できなくなってしまったら、すごく窮屈だと思う。 そうなると市内・県外へ進学・就職したい人が増えるかもしれない。自分で選択していける教育環境があればよいと思う。	
7	7		一人の子どもに大勢の大人が関わって育ててもらいたい。 米作り、野菜作り、自動車、PC、外国語学の先生、歴史等	
7	8		勉強以外のことを学ぶ場 ・人と人のコミュニケーション ・思いやりの心 ・判断力、想像力、発想力、行動力	
7	9		学校に行くと楽しいことがある。 ・今日は体育がある。 ・友達と話すのが楽しい等	子どもたちが学校へ行く意義が持てることが大事。勉強することも大事だが、それ以外のことも重要な時代になっているのかもしれない。
8	1	みんなで楽しく!! 年代を超えた交流	みんなが集まって楽しく遊べる学校	楽しいことは能力を伸ばしてくれる。保、小、中、高校、住民が集うことができる学校
8	2		小中高合同の学園祭	違う世代との交流を図る
8	3		各地域出身の生徒で祭を運営する	創造力、アイデア、団体行動、交渉力を身につけられる。優秀な地域は表彰される。

G	数	タイトル	意見	理由
8	4	牧之原大好き！ ⇒発信	学校の統廃合は時代の流れかな。統合後でも地域とのつながりを忘れない教育を。地域の組織の統合とならないように。理想と現実の差があっては困るのでは…。	
8	5		集約された学校の基本目標を学校だけでなく、地域全体で共有化していく必要があるのでは。	
8	6		人・もの・こと 牧之原市でしかできない学びがある。各学校で行われている特色ある教育がなくなることなく、もっと地域がより参入し学校がより開放的になることで深まることを期待。	牧之原市っていいな～と思う子を育てていきたい。
8	7		人・もの・こと 牧之原市を愛する人（郷土人）【地方】、中央のことをよく知る物知りな人【最先端】、地域に還元している人	子どもの将来のお手本になるような人が学びに関わることで、牧之原市の学びや将来につなげる
8	8		人・もの・こと 新しいシステムに対応する（ICTの導入・活用）	電子黒板・教科書・タブレット等世の中は常に進化・変化していく。地方は動向は知っていても対応は遅れがち。なるべく世の中を反映させていく。
8	9	未来の予想が実現したにように考えて行くことも必要	10～15年後の学校 ①少子化により人数が10人程度になっても地域のみなさんが協力して人間形成ができるような学校（静岡市大川小のような） ②親孝行できる教育（地域及び牧之原市の人口減少に歯止めを） ③英語教育は高学年から始めてほしい（日本語を大切に） ④少子化に対する対策を考えていただきたい。 ⑤小中一貫の前に幼保一貫教育の徹底。	
9	1	つながり（人と）	いろいろな人（友達、保護者、教員、地域の方）と触れ合い、関わり合いながら多くの経験（学習面・生活面）ができる学校。	これからの社会を生き抜いていく子どもたちにとっては、他と関わり、相手を尊重し認めていく心が大切であり、さまざまな体験は学びを深めたり、成長していくうえで、必要であるから。
9	2		学校間交流を頻繁に行う。	少子化が進んでおり、現在でもクラス替えすらない学校がある。そのことを補うため。
9	3	つながり（地域と）	地域と密着した活動を9年間の学びの中で必ず体験させる。カリキュラムを取り入れる。（小中一貫・キャリア教育）	牧之原市のもっとも優れた特色ある教育は、地域との連携（つながり）なので、それを市内のどの子にも体験・経験させたいから。

G	数	タイトル	意見	理由
9	4	集まる施設	地域を大切にするため、田沼塾をやれる中央公民館と小中一貫したk等い久、地域の人と人のつながりを持った学校	
9	5		学校は、10～15年後存続するのか。AIが進み、家庭で学習する。学校は週1くらい集まり、コミュニケーションづくりと対話の場所になるのではないか。通学したら楽しい場所が学校になればいいし、人員が減っても週1なので広い校舎もいらない。ただし、広い運動場や体育館は必要。思い切り遊べる場所づくりの学校。	
9	6		楽しい場所、対話、遊べるスペース ⇒人間力 勉強は家庭	
9	7	自治会残す活動	自治会は、小学校区の10区で今までの歴史・文化・伝統を大切に今まで通り、次回は10区で活動する。	
10	1		保幼小中高が1つにまとまった学園都市をつくる	
10	2		相良の人たちが集まりたくなる交通環境のよいところに（バイパス付近）に学校を集める。（相良総合G）	
10	3		牧之原に1校設置。スクールバス登校	
10	4		学校管理に地域雇用を増やす	
10	5		小学校低学年の学童がたくさん入れるスペース。時間を延ばす。（学童保育） 室内に食事できる場所や遊具がある。	
10	6		休日も自由に利用できる学校 ・図書館・体育館・グラウンド	
10	7		多目的な図書館・図書室等を充実してほしい。（学校内）	
10	8		休日等に子どもたちが遊べる学校にしてほしい。	
10	9		校舎内にコミュニティの場所をつくる。図書館、総合グラウンドを併せる。	
10	10		野球場がほしい	
10	11		もし学校が移転するなら跡地に牧之原の人が集まりたくなるような場所を！ 芝のサッカーグラウンドをつくる。	